
世界を跨ぐ力学の判例・織田信長

青山曜三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を跨ぐ力学の判例・織田信長

【Nコード】

N3798R

【作者名】

青山曜三

【あらすじ】

「唯一人の人間において、勇氣と知性の結合にもまして美しいものはない」という箴言がある。信長にはこの言葉はよく似合う。信長は日本の「プレデター」のようにわれわれとは異質の光芒を放っている。完璧な人間はいないにせよ、信長はある面においては完璧に近い人物であった。？・プーチンやH・キッシンヤーのような「おっかない」真の政治家とビビらずに渡り合える「日本人」は、やはり信長しかいないように思う。信長の頭脳と氷魂は大陸でも十分機能するにちがいない。「ローズウエルの事件（宇宙人の事件）」は

小説より真相を謳ったものの方が面白いと思う。私にとって信長は「ロズウエルの事件」に似ている。だがだれも真相を知らない以上この事件について書かれた出版物はすべて広義の意味では「小説」に属するのかも知れない。信長もまた然りである。「カリスマ」を宿していた史上唯一の日本人、私は信長をこのように定義している。今回は「信長公記」を基に桶狭間までの信長について取り組む所存である。

信長

まずは信長の人格について取り上げることにする。

次の話は「信長公記」にあるエピソードである。

まだ信長が若かったころ信長の領地（尾張）でネツシーのような怪物騒ぎが起きた。目撃者は又左衛門という男で、かれは、ある雨の日の夕方、とある堤防を通りがかったとき太さ一抱えほどもある黒い生き物が堤防に居るのを発見した。それは、鹿のような顔をした首の長い生物で、舌は人間の掌を開いたような形をしており、眼と舌が異様に光り輝いていた。

この話は噂となり、やがて信長の知るところとなった。

信長は又左衛門から直接事情を訊くと、

「アス、ジャガエラスル」

と家臣に命じた。

蛇替えとは蛇を捕らえるために池の水を？いだす作業のことである。翌日農夫等がこの作業に当たったが、なぜか七割近く汲み出すとそれ以上減らなくなってしまった。

すると信長は、

「サガシテクル」

と言って服を脱ぎはじめた。そして脇差を口にくわえると池に飛び込んで探し始めたという。だがいくら探してもそれらしきものは見つからなかった。一旦池から上がると、今度は鶉左衛門という家臣に探すよう命じた。だが鶉左衛門が探しても結果は同じであった。

結局、この事件は、

「オラン！」

ということで決着けりがついたようである。

この一事に信長の性格がよく現れている。怪物が潜んでいるという池に殿様自らが特攻隊長的に飛び込んで調べている。飛び込んだはいいが水中で怪物と鉢合わせとなったら常人はパニックを起こしてしまうだろう。怪物が一匹でなかったらそれこそ大ごとである。

ところが信長は脇差をくわえて飛び込んでいた。この一事から見つけ次第成敗するつもりでいたことがわかる。怪物より強い自信がなければできないことではないだろう。おそらく鵜左衛門という家臣は内心尻ごみしていたのであるろうが、怪物より信長の方が怖くて死ぬのを覚悟で探していたにちがいない。

因みにこの話をサノオとヤマタノオロチのような神話的な逸話とみるのは誤りである。作者の太田牛一は信長の古い家臣であり、『信長公記』は一級史料とみなされている。権威ある池田家文庫版のものには、「嘗て（かつて）私作私語に非ず、直に有ることを除かず、無きことを添へず。もし一点虚を書くときんば、天道如何ん」（『信長公記を読む』／堀新著／吉川光文館）と記されているという。なぜ脚色を自重したのか謎だが、嘘偽りを烈しく嫌悪し、不正確なことを忌み嫌った信長の性格をおもんぱかってこのような理を述べているのではなからうか。

くどいようだが仮に、池を心霊スポットに、怪物を悪霊（幽霊）に、脇差を懐中電灯にたとえると、信長の人間離れた性格が際立ってくる。怪物が潜んでいるという池に独りで飛び込むことは真夜中に悪霊のである屋敷に独りで乗り込むようなものである。ともに超常現象的且つ肝試的な要素を含んでいる。無闇に屋敷を焼き払わないことは池の水を？い出していることから察しがつく。忌まわしい伝説や惨殺事件があつた屋敷であれば演出の効果はてき面である。果たしてこの試みに耐えられるものがあるのだろうか。

ところが先のエピソードから独りで屋敷に乗り込む信長の姿が浮んでくる。そして悪霊がでるのを待つまでもなく懐中電灯を手にのしのと探し回る様子すがたが目に浮かぶ。脇差で怪物を退治しようと独りで池に飛び込む男が悪霊の出るのをじっと待っているとは考えられない。怪奇現象が起ればだれもが卒倒するか逃げ出すのであるのが、信長は逆に近づいてゆくように思う。そしてその場所へ行き、そこに懐中電灯を向けると食い入るように凝視し、それが人の形相かたちをしていれば、

「ナニモノダ」

とか、

「ソコデナニヲシテオル」

と詰問し、やがて真相をつかんでくるように思う。逃げ出したのは確かめようがないのだから真相が知りたければ調べるほかない。

「火起請ひきしょう」の話を知れば調べるのは必至である。

この話も「信長公記」にある若き日のエピソードで、真偽に対する信長の並々ならぬ気質が示されている。火起請とは当時行われていた原告と容疑者の双方に灼熱した鉄を持たせて裁決する原始的且つ非論理的な裁判のことである。

事件はたわいのないもので左介という男が甚兵衛という隣村の庄屋の家に押し入ったものの女房に見つかって未遂に終わったという事件である。両人は親しい関係にあり、左介は当時実権を握っていた信長の乳母の子池田恒興の家来であったという。双方が守護（おそらく斯波義銀だと思う）に言い分を申し立てたことから事がこじれ、火起請となったようである。

これに先たち双方に立会人を立てるよう申し置きがあった。場所はある神前とされ、検分のために奉行衆が列席する運びとなった。熱した鉄を持つと無罪で、落とすと有罪（死刑）である。不覚にも左

介は熱した斧（鉄）を落としてしまった。これで左介の有罪は確定である。が、これを池田派がもみ消そうと図ったために騒ぎとなってしまうたのである。

ちょうどその頃信長が鷹狩りの帰りでその側を通り掛かっていた。

この騒ぎに気付くと、

「ナニゴトダ」

と家臣に下問した。

何事ことの次第を知ると、信長はその場に姿を現した。そして双方の言い分を聞き、その場の様子に目を凝らしているうちに顔色が変わったという。信長は左介に持たせたのと同じように鉄を焼くよう命じた。そして、自分がこの鉄を無事に受け取ることができたら、左介を成敗せねばならぬのだから、そのように心得よ、と言ってその焼いた斧（鉄）を受け取り三歩歩いて棚に置いたという。そして、

「コノトオリダ。ミテイタナ」

と言って左介を成敗させたという。（『現代語訳 信長公記 上』

／太田牛一著／中川太一訳／新人物往来社）より参照

「すさまじい出来事だった」という感慨をもらしていることから太田はその場に居たようである。忘れられないショッキングな出来事だったがゆえに取り上げたにちがいない。この事件をリアルに捉えると、当然、信長の掌の肉が焼ける音と臭いがしたはずである。にもかかわらず、平然と鉄を握りしめて然るべき場所に置く信長の姿が浮んでくる。

ドラマの「水戸黄門」ではこうはゆかないだろう。印籠の権威を盾に左介と池田派を処罰するのがオチである。ところが信長は甚兵衛の言い分が正しいとみるや甚兵衛の代わりに鉄を持って左介を成敗している。おれはこの手の不正を許さん、今後一切許さないぞ、わ

かつたな、という警告を、わが身を犠牲にして睨みを利かせている。この潔癖なまでに正道を重んじ、そのためには自虐的な行為も持たない苛烈な男が悪霊を怖れて真相を蔑ろにするはずがない。

神仏（靈魂等）に対する信仰心は『日本史』（F・フロイス著／松田毅一・川崎桃太訳／中央公論社）の次の記述が印象的である。

彼は公方様の台所に大きい暖炉を造らせ、その入口の両側には寺院から取って来た双手を挙げている。二基の石像を立たせ、これらの仏の頭上に、米を炊き湯を沸かす大鍋を置いた。

信長を見る周囲の雰囲気伝わってくる。

信長の実像に迫るためにもう少しこの面（性格）について続けることにする。

この人間離れた一面は有名な親父（信秀）の葬儀でのエピソードに如実に現れている。親父の葬儀のとき、例の茶筌齧のいでたちで現れ、仏前に抹香を投げつけた話は有名である。

この事件は信長の型破りの奇行のひとつとしてごく自然に受け止められている観があるが、この事件をリアルに捉えたいへんな人格が浮んでくる。要するにこの話は「コロンブスの卵」の一例である。信長以前にこのような真似をしたものがいたとは思えないし、以後も同じであり、おそらく東洋史においても居ないはずである。故人が親の仇や怨みに思う者であればあるいはいたかもしれないが、これは憶測に過ぎない。おそらく信長は「する」必要に迫られて「した」のであろうが、だからといって多くの弔問客が居るなかで公然とできるかというところできないのが人間の性さがのように思う。

この観点からみると信長には人間離れた一面があったことを認め

ざるを得ないだろう。そしてその偉業は破格である。稚拙な表現をすると信長は日本史の「まさか！」の記録ホルダーである。桶狭間の戦いの勝利は当時においても「まさか！」であり、秀吉の登用も「まさか！」であり、足利義昭を擁しての上洛も「まさか！」であり、比叡山焼き討ちも「まさか！」であり、長篠の戦いの勝利も「まさか！」であり、石山本願寺との講和と移転も「まさか！」であり、そして本能寺の変の死も「まさか！」といったようにダントツの首位を誇っている。

また戦国時代の人々の「天下統一」という理念への意識はいままでいうと世界平和のそれに等しかったという説がある。だれもが世界（地球）の平和を望みながらどうすることもできずにいるように戦国の人々もこれと似た感覚で捉えていたという見方である。だれもが漠然と願うだけで本気で考えないようにあの時代の人々もそうだったとすると、弱小勢力の身から勝ち抜いて天下統一の大半を独力で成し遂げた信長の偉業は異常というほかない。

藤田達生氏が『秀吉神話をくつがえす』（藤田達生著／講談社現代新書）のなかで、

天下統一は、時代の必然のなりゆきではなかった。たまたま信長という男が現れ、主家であった管領斯波氏の後継者を任じて足利將軍に接近し、また、長期に及ぶ戦争を勝ち抜く優秀な長槍隊・鉄砲隊を大規模編成したことによって、周囲の戦国大名国家が否定され、集権化が促進されたのである

現実には、数力国を領国とする強大な戦国大名でも、わざわざ危険を冒しても天下を狙うようなことはしなかった。彼らの関心はあくまでも地域支配の安定化にあり、大軍を擁して上洛戦を敢行する必然性など、そもそもないのである

と述べていることはこの問題の核心を突いている。つまり信長の天下統一事業は「時代からの要請」ではなく織田信長という一人の人格に因って具象化された突然変異的な出来事だったのである。戦国大名は守護やだれかの言いなりになるのが嫌で戦国大名化していたのだからこれを否定する天下統一を望むはずがない。事実信長は二度も信長包囲網を築かれている。傀儡の將軍ならまだしも新興勢力の指導者など笑止といった気分だったにちがいない。それを力と運でねじ伏せたのであれば「押し付けた」という解釈も可能である。この点を履き違えるとともにない解釈を導くおそれがある。

たとえば資料を読むとおかしな解釈が山のように一般化している。その一例が長篠の戦いである。この戦は三千挺の鉄砲隊を三列に配して武田の騎馬隊をつるべ撃ちして勝った画期的な合戦いくさとして知られている。この合戦の勝利は信長神話の象徴的な事件のひとつとして史実のように扱われているが、ちょっと考えればこのようなことがなかったことは明白である。

というのは、三千挺の鉄砲隊を三列に分けると一列は千ということになる。整列していたのではつるべ撃ちできないのだから銃がぶつからないよう最低でも一メートルの間隔はあけねばならないだろう。この計算で行くとこの列の距離は一キロということになる。一キロの列というのはたいへんな距離と人数かずである。おそらく先頭に立つと後尾は見えないはずである。どうやって一斉射撃するのか。

またこのような奇策を余儀なくされるほど武田軍に馬が居たとは考えられない。当時馬が貴重な戦力だったことはだれもが知るところである。この戦術に見合うだけの馬がいたとなると武田の領土は馬と厩務員だらけになってしまうだろう。おそらくこの戦術を採るとバラバラに入れ替わりながらだれも居ない場所まちに撃つ間抜けな射撃

手が多く出るはずでこれでは生粹の合理主義者の信長の性格と矛盾する。

さらにこの戦術だと一巡しただけで三千発の銃弾が無くなることになる。だとするといったい何発弾を用意していたかが問題となる。この戦術で戦うのであれば何十万発もの銃弾がなければ意味がないだろう。相手を驚かすだけでは嗤われるのがオチである。当時の日本は火薬（硝石）を輸入していたといわれている。またこの時期信長は各地に転戦していた。どこでも銃は必需品だったはずである。果たしてこのような戦況でこの戦術が採れたかわたしはすこぶる疑問である。

この他にも、信長が二千五百挺、家康が五百挺の合わせて三千挺の鉄砲隊だったという説が有力である。この話を信じると両軍の合同演習なしでの実戦は無理なはずなのにこれを示す史料は見つかっていない。またこれを取り上げる史料は史料価値の低い（信長の小説と揶揄する者もいる）小瀬甫庵の『信長記』のみとされている。ならば史料的にも信憑性が低いといわざるを得ないだろう。

これに対し武田軍には九千頭もの馬がいたという説がある（『歴史読本』立体構成 長篠の戦い）。だが『甲陽軍鑑』（教育社）には「信長が長篠で柵の木を築かれたのは、強敵に出あつてのすぐれた智略でほめてもいいが、武田勢の騎馬軍団がそのまま攻めたというのは嘘である。長篠の合戦場は、十騎と並べて駆けられる所ではない」と記されているし、一万八千だったという武田軍に九千もの騎馬武者がいたということは常識では考えられないことである。一斉射撃でなかったのかも知れないが、この見方を採ると、どうやって勝ったかが問題となり勝因が辿れなくなる。いずれにせよ検証（再現）しても結果は同じだと思う。

ここでまとめに入ることにする。

信長は日本の不動のエースである。本気度、執念、勇氣、知性、覚悟、忍耐力、決断力、独創力、外交力、国家ヴィジョン、強運、実績などどれをとってもその力は超一流である。

謙信と信玄は川中島で五回も戦っているが（諸説がある）、信長はこの手のことは避けている。五回も戦って勝てないとなると学習能力と本気度を疑われても致し方ないだろう。これに引き換え信長は一度（正確には二度）で武田氏を滅ぼしている。上杉氏を倒すのも時間の問題だったとみられている。総合的な能力と目的意識の違いがこの差を生んでいるのである。

以上のように信長は難解な男だが、「性格のポイント」をつかむのは容易である。

たとえば人はよく「オーラ」という言葉を使っている。オーラが見える、とか、オーラを感じる、といった言葉をよく耳にする。なんとなく褒め言葉のように聞こえるこの言葉にわたしは違和感を覚える。ほんとうに「見えている」のか疑っているからである。見えるのならそれが、どのような形をし、どのような色をしているのか知っていないければ不合理である。またなぜその心証や感情を「オーラ」と決め付けるのかもよく分からない。「オーラ」とは何か？ さらにその「オーラ」なるものを放っていると何が凄いのかも意味不明である。おそらく日本的な空気やノリを頼りにそのように表現しているであろうが、この手の空気が読めない男、認めない男を想像すると信長の性格をコピーし易くなると思う。

おそらく信長に、

「オーラがある」

と、おべっかを使うものなら喜ぶどころか目つきが変わって、どんな色をしていたか、ほんとうに見えたのか、といったことを厳しく問い質すにちがいない。そして答えられないと、二度と使うな、

と釘を刺すはずである。

因みにオーラはともかくとして、「カリスマ」を放っていたことは確かであろうである。L・フロイスは『日本史』のなかで、

彼には超人的な何ものかがあり、また人々はそのように喧伝し、彼がその業においてますます繁栄して行くのを見ていたからである

と記している。部外者の外国人の宣教師の証言だけに説得力があると思う。

この「喧伝」という言葉は極めて重要である。この喧伝を広報的な意味で捉えると信長のイメージ戦略が読めてくる。あのしまり屋の信長が意に反した「自分の噂」を許すはずがない。だとすると周囲が自発的に喧伝するよう図っていたふしがある。

この「カリスマ的指導者」という見方についてはカリスマという概念の祖とされるM・ウェーバーの『支配の諸形態』（M・ウェーバー著／世良晃志郎訳／創文社）を読むと参考になる。たとえば次のくだりは、信長と、信長の戦いをみごとに謳っていると思う。

カリスマは、伝統に拘束された諸時代における偉大な革命的力そのものである。「理性」ratioも同じ革命的な力をもっているが、これは、まさに外面から―すなわち生活状況や生活上の諸問題を変更し、それによって間接的に生活に対する態度を変更することによって、あるいはまた知性化を通じて―作用する。これとちがって、カリスマは、内面からの変更もありうる。この内面からの変革は、苦悩や熱狂から生まれ、あらゆる個々の生活形式や「現世」^{ヴェルト}一般に対するいっさいの態度の全く新たな志向を生み出すことによって、心情や行為の中心的方向を変更することを意味する。合理主義以

前の時代においては、伝統とカリスマとが、行為の志向方向のほとんど全体を、相互の間に二分しているのである。

カリスマは、その最高の現象形態においては、およそ規則や伝統一般を粉碎し、一切の神聖性概念を端的に覆滅する。それは、古来慣行的なるもの、したがって神聖化せられたるもの、に対するピエテートの代わりに、いまだかつて存在せざりしもの、絶対的に無類なるもの、したがって神的なるもの、に対する内面的服従を強制する。それは、純経験的な・没価値的な意味において、確かに歴史のすぐれた「創造的」・革命的な力なのである。

このカリスマ観に該当する日本の歴史上の人物は信長しかいないと思う。

実際、強運という観点からみても、信長の運の強さは異常である。例えば信玄と謙信は信長の宿敵の双壁であった。信長はこの両雄と戦うのを避けていたといわれている。ところがいざ決戦となるや二人ともポツクリと逝ってしまうのである。まるで罰が当たったかのように信玄は信長の眼と鼻の先まで迫つていながらポツクリ逝き（癌だとみられている）、謙信も厠で倒れるとそのまま帰らぬ人となっている（脳卒中だとみられている）。

このような都合のよい強運は常識では有り得ないだろう。太平洋戦争のとき開戦と同時にルーズベルトがポツクリ逝き、日ソ不可侵条約を破った矢先にスターリンがポツクリ逝くようなもので夢でも信じられないような話である。この他にも、桶狭間のときの突然の大風雨と奇襲の成功、杉谷善住坊の狙撃が外れたこと、秀吉・光秀といった逸材が自然に集まってきたことなど生涯強運に次ぐ強運に恵まれている。

この意味でいうと本能寺の変も例外とは言えないのである。信長の肉体（遺体）はまるで忽然と消えたかのように本能寺の現場から消滅したとされている。仮に遺体が見つかって首を曝されていたら、日本の行方も、信長のイメージも違っていたはずである。ここに信長の意地を見てとることができる。首の動向が光秀の野望を左右することを知っていたのである。だがあの不意の状況の中でだれもが信長のように意地を貫けるかというところが行かないだろう。光秀は信長と秀吉の運に負けたのである。

こういう男は世界史でも稀ではなからうか。

マケドニアのアレキサンダー三世に多少似たところが見られる程度で他には見当たらないようである。信長は「現世のみならず天においても自分を支配するものはいない」と豪語していたという。アレキサンダーも萎縮するような強烈な矜持である。実際、薬師如来なるものが病気を治したためしも、大日如来なるものが鎮護国家を適えたこともないのだから無味乾燥な仏典を信じるより遙かに健全で生に沿う有意義な「独創」といえる。なぜこの極東の島国に「純粹の権化」のような麒麟児が生れたのだろうか。これにはきっと深い意味があるにちがいない。

というのは信長の評価のひとつに地球が丸いことを理解したことが挙げられている。たしかに時代を考えれば凄いことにちがいない。だが「人から教わって」理解したことを凄いと感じているようではN・コペルニクスの真似は到底できないだろう。コペルニクスは「地球が丸い」ことを発見しただけでなくそれを世界に認めさせたのである。「地球が丸い」と公言しても「だから？」という反応しか得られないのではこの発見は空砲でしかない。これはE・ニュートンやP・ピカソにおいても同じである。

この意味で言うと信長の勝因はここに要因があるとも言えそうであ

る。少なくとも信長は「地球が丸い」という考えに関心を示し、その真偽について探求できる教養と能力を具えていた。事の重要さを悟る超時代的な「自己」を築き上げていたのである。戦と手柄のことしか関心のない他者とはこれまた天と地ほどの差があったことは明徹である。信長に適わなかったのは当然と言える。

だがこの信長の一事を凄いと評価することは信長の他者のそれとあまり変らないのではなからうか。だとすると今も当時もあまり変らないことになる。この意味でいうと、信長は日本男児の十字架といえる。事実信長を乗り越える者が現れると思うものがあるだろうか。だがコペルニクスやニュートンを生み出す列強国は信長など歯牙にかけていないかも知れない。この現実は深刻である。果して信長は日本レベルの英雄でしかないのだろうか。

私は信長から多くを学んだ。物事と取り組む姿勢と覚悟、諦めない精神。容易に自己を曝け出さない強さと智への絶対的な信仰など世界のどの英雄より影響を受けている。世界文学の理想を体現する男が信長だとさえ考えている。信長の生は不条理な世界への一つの解答であり、実存を地で行く一つの理念を実践したのが信長だとさえ思える。信長のようになれずにひたする文字を綴ってきたのが世界の歴史ではなからうか。信長から見れば「ムルソー（異邦人）」も「未熟者」の「変な奴」でしかない。ここに世界の盲点がある。私はここに着目しているのである。信長を再認識することの意義はここにある。以上が本稿の論旨である。

さて今回は桶狭間で区切るつもりでいる。これ以後は信長が新天地を求めてさらにパワーアップするのていまの私の能力と境遇では無理である。この猛獣を飼う巨人と渡り合える力は残念ながらいまの

私には無いのである。ただ私の信長観は従来の信長像とはかなり違うようなのでその一端を綴ろうと思う。

前置きが能書きになりつつある。悪い兆候である。

早速時間的順序に沿って幼年時代から追ってみることにする。

幼年時代

織田信長は1534（天文三年）五月、尾張勝幡城主織田信秀の三男として勝幡城で生れた（那古野城誕生説もある）。生母は土田氏（正室）。童名は吉法師である。兄たちを差し置いて家督を継いだのは正室の嫡男だったことが要因とみられている。

この時期の史料を読むと早速乳母の件で躓くことになる。くだらない議論のように思えるかもしれないが信長の幼年期を知るうえで重要である。まずはどのような話か『織田信長総合事典』（岡田正人編／雄山閣出版）のくだりを引用するので注目してほしい。

吉法師は、誕生後直ちに乳母のもとで養育されることになった。だが非常に疳が強く、乳母の乳首をかみ破るため、何人も乳母が交代したといわれる。ところが池田恒利の妻（養徳院）を乳母にしたところ、吉法師はその乳首だけは不思議にもかみ破らなかつたといわれる

この話を信じろというのは土台無理ではなからうか。この話を信じると、信長は生まれながらにして女の乳首を噛みちぎる鋭い歯と強力な顎をもっていたことになる。乳首を食いちぎられれば当然女は悲鳴を上げるちがいない。そして出血するはずである。だとすると信長の口も血で赤くに染まっていたと捉えねばならない。こんなことを懲りずに繰り返していたと述べている。これではまるで怪談である。

肯定的な意見もあるので参考として取り上げることにする（相手への配慮のため名前と出典は控えることにする）。

吉法師は生まれつき狂暴であつた。小さな歯で乳母の乳首にかみつく。かみ破られたものもあり、何人が交代した。

池田恒利の夫人（恒興の母）が乳を与えるにいたつて、ようやくその癖がやんだと伝えられる。乳質が気に入つたのか、なにかしらの親近感をおぼえたものか。

乳児は敏感である。

もしかしたら実の父母と生き別れ、他人に囲まれて育つという、スキンシップのない状態に本能的に反発したのかもしれない。

歴史と旅 特集織田信長の史話50選 織田吉法師誕生の項より

ある方の意見だが、この説によると、ほかの女の母乳が「不味かつた」ので怒つてかみ破つたことになる。これが理由であればまさに生まれつき狂暴な性格だつたにちがいない。だがこれを説くのであれば乳幼児の「味覚の発達と意識」の件が不可欠となる。また「スキンシップのない状態に本能的に反発した」というのであれば、乳幼児が自分の境遇を本能的に察知できる科学的論拠が必要である。さらに、なぜ男の信長が女の乳房に「親近感」を抱くのかも謎である。親近感ではなく求愛と羨望を抱くのがふつつの男子ではなからうか。蓋然的な意見にせよ、この理屈では納得できない。

これとは別に精神医学的見地から解釈したものもあるので公正を期すために取り上げることにする。

信長については、乳児期に、「癪が強くてよく乳母の乳房を噛み破つた」という話が伝えられている。このことに示される口愛期的な攻撃性の強さは、信長の一生を通じる性格上の主題となっている。

これはどういう事かという点、出生から一歳半までの乳幼児は、母親の乳房を吸うことによって快感を感じる。口愛期においては、おしゃぶりや指しゃぶりによって快感も感じており、他の幼児性欲と同様に自体愛的（ナルシズム的）である。口愛期には、歯が発育し、

嘔みつき、食いちぎり、対象を破壊するという口唇サディズム期があると精神分析家のK・アブラハムは言うのであるが、信長の場合、この口唇サディズム的な傾向が、その人生のあとまで残るのである。口愛期に、自分が信頼されているという信念を与えてくれるような母親によって養育されると、乳児の中に基本的信頼感が生まれ、その逆の場合に不信感が生じる。母親に対するこの時期の依付性が拒否されると、母親に対する不満や攻撃性が生じる。

単純に考えても、癩性で、乳母の乳首を嘔み破ってばかりいて、その結果、乳母になり手がなくなった信長に、この時期の強い欲求不満がなかった筈がない。しかも母親は依存の対象でもあるので、同一対象に対する愛情の両面を感じる。そこからくる罪責感が鬱病に關係するといわれている（鈴木寿治「口愛期」『精神医学大事典』講談社）。ここに「暗鬱なる独裁者」信長の「影」の部分の一つの背景を、私たちは発見することができるかもしれない。

この説の問題点は、信長のような何人もの乳首をかみ破る症例が他に存在するかが不明な点と「口唇サディスト的な傾向が、その人生のあとまで残るのである」という見解が独断となっている点である。別の表現で「口愛期的な攻撃性の強さが信長の一生を通じての性格上の主題」と位置づけているが、性格上の主題はこれだけとはいえない。松田毅一氏が『南蛮史料の発見』（松田毅一著／中公新書）の中で「不整頓と不潔の敵」と称しているようにこの潔癖な面も信長の「性格上の主題」のひとつである。信長に十八回も謁見したというL・フロイスの『日本史』（L・フロイス著／松田毅一・川崎桃太訳／中央公論社）を読むといたるところで「清潔」という表現が使われている。ためしその一部を抜粋してみる。

・彼は自邸においてきわめて清潔であり。

・幾多の高価な馬に満ちた厩は、非常に清潔で、娯楽室としても結構役立つように思われる。街路ははなはだ長く広大で、日に二、

三度清掃された。

・彼は近習の家臣の良き態度と清潔さ、山の周辺の雑踏と仕事場の音、これらすべては日本（人たち）にとっては、見る者におおくなる驚嘆の念を起さずにはおかぬものがあるように思われた。

・主要な壁はすべて上から下まで見事な出来栄の清潔な鉄で掩われている。

・それらにはいずれも金が施されており、人力をもつてしてはこれ以上到達し得ないほど清潔で見事な出来栄を示していた。

・彼は近江国の安土山に、実に見事で不思議なほど清潔な城と宮殿を造営した。

また松田氏は「不整頓と不潔の敵」という表現を使った文章のなかで次のようなおもしろいエピソードを取り上げている。

この年の十一月三日、信長は、予告なしに、安土の修院を訪ねてきた。パードレがその訪問を知らされないうちに、信長はすでに建物のなかに入ってきていた。彼は「不整頓と不潔の敵」であったから、パードレの家がどのような状態にあるか下心があつたものと思われる。オルガンチーノは、このことを予知して、欠点がないようにつねに注意怠るところがなかった。信長は最上階に昇り、従者一同を階下にとどめて、パードレたちと親しく語り、備えつけのクラブ（ピアノの前身楽器）とヴィオラを演奏せしめた。「十五八二年」天正一〇「年度年報」の記事はこのころのイエズス会士が信長をどのように見ていたかを知るうえで意義ぶかい。

要するに宣教師たちの品定めするために抜き打ちで視察にきたのである。このとき、散らかしていたり、ゴミが落ちていようものなら音楽の饗宴とはならなかつたはずである。

この潔癖な面も信長の性格の重要な位置を占めている。不潔なこと

を生理的に忌避する癖のある信長が乳幼児のときであつても女の乳房を噛みちぎつて口を血で汚す真似をするだろうか。フロイスの証言はこの氣質が性格的にかなり根深いものであつたことを示している。後のイメージが刷り込まれている心証を受ける。

ここで視点を変えると、私はこの手の性格論的な議論はあまり意味がないと思う。この話を設定した監督は信秀であつて、信長は話の主役に過ぎない。事実養徳院は乳母の候補者の中から選ばれている。信秀がこの人選と選考に関わつていたことは確実である。そして信秀が養徳院を選んだ張本人とみるとここに何らかの理由が存在することになる。この視点の方が乳首実験の叙述を真に受けるより話の筋に合つていると思う。

ではどのような理由が考えられるのだろうか。

以下が推理の一例である。

この謎を解くカギは「養育」という言葉にある。養育には「育てる」ほかに「保護する」という意味がある。ただ単に土田氏（信長の生母）が母乳の出ない女であれば事はいたつて単純である。餓死させないために乳母をつけたに過ぎない。乳母の養育は慣例だつたという意見もあるが織田家が倣つていたかは不明である。

このように整理すると原因は織田家（家庭）にあるとみるのが自然である。事実織田家の事情で乳母をつけている。信長の場合は武家なので家庭というより一族の見地で捉える方が妥当である。以下が織田弾正忠家の簡単な履歴である。

織田弾正忠家台頭の立役者は信長の祖父の信定（信貞）とみられている。信貞は1504年頃勝幡城を築いて勢力の基盤を固めた。「愛知県の地名 日本歴史地名大系二三巻」（平凡社）によるとこの

地域は斯波武衛家（尾張の守護）の家臣団の所有する地域であったという。尾張の守護代が織田氏である。織田氏は当時岩倉織田氏（伊勢守家）と、清洲織田氏（大和守家）とに分かれて対立しており、信定は清洲織田氏（大和守家）の三奉行の一人として弾正忠を名乗っていた。平和町誌によると、信定は初め小口城主となり木下城主も兼任していたという。その後勝幡から中島郡・海西郡と勢力を広げ、1524（大永四年）夏にこの地域で唯一の要港であった津島を支配下にし、経済力の強化を図った。この津島からの資金源が後の信秀・信長の躍進の原動力となったという見方が通説である。

勝幡城の復元図が公表されているが異説もあるのでなんともいえない。ただ、立派な城であったこと、平城であったこと、堀が設けられていたことだけは確かなようである。

信秀は信長同様勝幡城で信定の嫡男として生まれている。生母は「いぬい」といい、いぬいは乳母を置かずに信秀を育てたという（『織田信秀の系譜』／横山住雄著／教育出版文化協会）。信秀には、信康、信光、信実、信次の男の兄弟と何人かの女の兄弟がいた。すべてが同腹かは不明である。天文二年（1533）に公家の山科言継が信秀の邸（勝幡城）に招かれている。このとき信康と信光が同居していたという説がある（『織田信秀の系譜』／横山住雄著／教育出版文化協会）。かれらが勝幡城に居たのであれば年下の兄弟姉妹も同居していた可能性がある。この出来事は信長が生まれる前年の話である。ならば信長の兄たちも同居していたとみるのが自然である。この説を信じると信長はかなりの大所帯のなかで生まれたことになる。

さてここで重要となるのは織田氏が尾張の守護代の座をめぐって応仁の乱の頃から骨肉の争いを続けていたことである。織田氏ほど長期にわたって一族郎党が争う例は戦国の世でも稀な例に属する。当

然信秀もこのことを認識していたにちがいない。ここにこの謎を解くカギが有りそうである。

信秀が兄弟と争った形跡はないが弟たちと信長（嫡男）の同居という状況に懸念を抱いていたとしてもおかしくないだろう。織田家最強の実力者に成り上がりつつある自分のことを弟たちは苦々しく思っているかも知れない。分家が本家を好ましく思わないのはいつの世でも同じである。L・フロイスは『ヨーロッパ文化と日本文化』（L・フロイス著／岡田章雄訳／岩波文庫）のなかで、

ヨーロッパでは、男女とも近親者同志の情愛が非常に深い。日本ではそれが極めて薄く互いに見知らぬ者のように振舞う。

と記している。

ヨーロッパと比較しての話だろうが、武士社会ではこの傾向が著しかったにちがいない。猜疑心がなかったといえば嘘になるだろう。史料を読むと信秀は希代の人格者だったようである。織田家のリーダー的な存在でありながら主家を敬い終始織田家の協調路線に努めている。稀有な下剋上の反対論者であり、ハイカラで、聡明であったことから兄弟や家臣からも慕われていたようである。このような状況で事を荒立てたくなければ何かの理由をつけて信長を安全な場所に移すのが無難である。そうすれば弟たちの気分を害さずに済むし、自分が斃れても弾正忠家の血を保つことができる。そこで乳母に預けるという方針が採られたのだと思う。後に平手政秀が傳役に付くのもこの方針の一貫かもしれない。

この推理に立つと、よほど頼りとなり、信用のおける家臣でなければ大事な嫡男を預けるわけにはゆかないだろう。そこで選ばれたのが池田恒興の母親というより、恒興の親父の「恒利」だったのである。乳母より乳母の「夫」を重視するのは当然である。恒利に預け

れば必然的にかれの妻（養徳院）が面倒をみることになる。信長との相性も買われて彼女が選ばれたのだと思う。これが事の顛末ではなからうか。

なぜ乳首の話にすり替わったのかは不明である。もはや池田家でも見当がつかない事態となつていているようである。ただ養徳院は後に信秀の側室となつて娘を産んでいる。恒利の死後信秀が引き取つたという話をどこかで読んだことがあるが判然としない。この娘は信長の異母妹であり、恒興の異父妹である。恒興は信長の乳兄弟であり、当時の慣習では信長の義理の兄弟となる。始めに紹介した「火起請」^{ひきせま}の中でも「信長の乳母の子池田恒興」としてその権勢ぶりを詰らされている。なにやらこのへんに事情があつて妙なトリック（小細工）を使つているのかも知れないが、これは池田家の問題であつて信長とは関係ないので省くことにする。

当然のことながら幼年期は普通の子供だつたということである。

少年時代

次に少年時代を取り上げることにする。
手掛かりとなる史料は『信長公記』の次のくだりである。

ある時、信秀は尾張の国の中央部、那古野に来て、ここに堅固な城を築くように命じ、この城に、嫡男の織田吉法師を住ませた。一番家老林秀貞・二番家老平手政秀・三番家老青山与三右衛門・四番家老内藤勝介、これらの長老をつけ、台所方の経理は平手政秀に担当させた。吉法師は何かと不自由なことが多かったが、そのような中で、天王坊という寺に通って学問をした。

信秀は、那古野の城を吉法師に譲り、自分は熱田の近くに古渡ふるわたという所に新しい城を造って居城とした。台所方の経理担当は山田弥右衛門であった。『現代語訳 信長公記 上』／太田牛一著／中川太一訳／新人物往来社)

このくだりで注目すべき点は、最初の段落では「城に住ませた」となっているのに対し、次の段落では「城を譲り」となっている点である。そしてこの間に「何かと不自由なことが多かった」という節が介在している。この文脈は何を意味しているのだろうか。

私の解釈は次のとおりである。

信秀が今川氏豊から那古野城を奪ったのは信長が生れる二年前の1532年（天文元年）のこととされている（1538年説もある）。那古野城誕生論者はこれを根拠にそのまま城主となったかのように捉えているが、赤ん坊を城主にして何の意味があるのか理解に苦しむのは私だけではないはずである。信長の身の危険という観点から見ても不可解な処遇といわざるを得ない。いかに信頼する重臣といえども所詮は他人である。幼い嫡男を城主にすれば人質にして城を

乗っ取るかもしれないし、また家康のように敵方に売り飛ばさないと
も限らない。捨て殺しにしてよいなら別だが、信秀が一貫して信
長を後継者として支持していたことを思うとこの説は信秀の意思と
矛盾している。

実際信秀が那古野城に居たという「確証」はなく、また信長が那古
野城主となるまでの約二年間だれが城主であったのかも不明となる
と、この説では1532年という年だけが一人歩きをしていること
になる。

だとすると、この事件は1538年に起きたとみるのが自然である。
(信長は)勝幡城で生まれ、その後那古野城の事件が起こり、こ
の後に那古野城主となって自立したという解釈である。信長が15
34年生まれで、那古野城の事件が1538年に起きたと仮定する
と、信長は四歳で那古野城に入ったことになるが、このくだりの冒
頭に「ある時」と記されていることを考慮すると四歳と断定するの
は危険である。『織田信長総合事典』の年譜はなぜか「九歳」とし
ているが、元服前の少年だったという見方は同じである(この他に、
八歳、十一歳などの諸説がある)。

ではこの話はどのように解釈したらよいのだろうか。

私は年齢としの議論はあまり意味がないと思う。この話は信長が「見ど
ころのある少年だった」ことを意味しているからである。見どころ
のある少年だったからこそ信秀は信長を信じて(期待して)那古野
城主にしたのであり、重臣たちも信長であれば異論がなかったこと
をこの話は示している。したがって信長は物心がついたときからす
でに普通の子と違っていたと認識することが肝心である。どのよう
に違っていたかは「城を任せられる子」という物差しで計るほか知
りようがないだろう。これをいま風に表現すれば、本城(勝幡城)

を本社とすると幼い実子（嫡男）に重要な支店（那古野城）を任せるといった評価ではなからうか。

以上のことを整理すると次のようになる。

信秀は見どころのある信長を那古野城主にしたいと考えていた。だがいくら非凡であつても信長はまだ子供である。常識では無理でも信長なら務まるかもしれない。そんなジレンマが信秀を悩ませていた。そこで一旦城に住まわせて様子を見ることにしたのである。那古野城は尾張の中央部に位置する重要な支城（拠点）である。ここに信長を送り込むとなると大きな賭けとなる。噂はすぐに広まるにちがいない。不穏な動きも想定せねばならないだろう。そこで堅固な城が必要となり、まずはこの措置を命じた。城が出来上がると、一番から四番家老（長老）までの重臣を信長につけて万全を期して送り込んだのである。このために信長は「多くの不自由」を味わう羽目となった。少年には荷が重い「仕事」なのだから当然である。だが信長は見事に信秀の期待に心えて「合格」した。そこで信秀は信長に那古野城を譲って城主とし、自身は古渡に新しい城を造って新体制を敷き、勢力の拡大を図ったのである（信秀が勝幡城から古渡城に移ったのはすぐではなかったようである）。

ほとんど超人伝説や聖人伝のような浮世離れした話だが、最初から城を譲ったわけではなく、住ませた後に譲るという工程を組んでいる以上この間に何らかの試みがあり、その結果として城を譲ったとみるのが自然である。そしてその試みが城を譲っていることから城主になるための試練（試用期間）であつたことがわかる。したがつてこの話は少年時代に那古野城主となるための試練を受けたことを述べているのであつて年齢の問題を説くのが本意でないこととなる。

作者の太田牛一は殊勝にも不自由な生活の例として「天王坊という寺に通つて学問した」ことを挙げている。この天王坊という寺は通常津島神社を指すといわれている。勝幡城から津島までの距離は約三キロに対し、那古野城から津島までの距離は約十五キロである。片道十五キロということは、単純計算すると、往復三十キロという距離になる。勝幡城から通えば往復六キロで済むのに那古野城からだとは五倍の距離となる計算である。一見無駄としか思えないこの教育方針も城主となるための試練だったのかも知れない（おそらく要港津島の雰囲気にもふれさせて経済感覚を磨くためと、津島の有力者たちとの友好を図るためだったと思う）。黙つてこの試練に耐える幼い信長の姿が目には浮ぶ。

太田は実際にその様子を見たことがあつたにちがいない。だからこそ忘れられない信長の「コマ」としてこの話を入れずにおれなかつたのである。おそらくこの文章は「吉法師は何かと不自由なことが多かつたが、そのような中で、天王坊という『不便な寺』に通つて学問をした」とするのが正しいはずである。ランボオ一家の通学光景が伝説となつているように少年信長の通学も当時の尾張では話題となつていたにちがいない。

当然のことながらこの不自由な生活はその後も続いたはずである。いつまでも乳呑み子でいられるはずがなく、信秀の次の期待が一刻も早く一人前の武将になることであることも分かりきつて以上甘えてはおれないからである。平手政秀は「城に住ませた」段階では台所方の経理であつたが、「城を譲られた」後は定説どおり傳役として信長の指導に厳しく当たつたはずである。

他の三人の重臣との関係は複雑であつたと想像する。このことはその後の人生に色濃く現れるトラウマ的な個性に現れている。

たとえばあの独裁への異常な拘りはこの時期のトラウマかも知れない。「不自由なこと」がその後も続いており、この忌まわしい経験を繰り返したくないという一途な執念おもいが独裁の原動力となっていたかもしれないからである。

あの徹底した無神論の信念もこの時期に起因する可能性がある。信秀の試練に根を上げれば後継者の地位が危なくなる以上どんなことがあっても挫けるわけにはゆかないという思いを胸に必死であったであろう信長にとって、頼れるのは自分だけであり、神仏に縋つてもどうにもならないことを身にしみて学んだ可能性が有るからである。

神仏にすぎらない者が人を頼ることほど滑稽なことはないだろう。人が当てにならないことは大人ならだれもが知る常識である。軍師を置かないワンマンなスタイルもこの派生かも知れない。正確には他人ひとを頼りたくてもできない性格となっていたのであろうが、この人格障害とも採れる心の傷もこの時期に負ったのかも知れない。信長の人生を左右する精神的に相当きつい経験だったと推察する。

この当時の信長の心境はL・フロイスの『ヨーロッパ文化と日本文化』の次のくだりが参考になる。

ヨーロッパの親たちは事があれば、息子と直接に交渉をする。日本ではすべて使者または仲介人を通じておこなう。

このくだりには武士の間では親子であっても他人のように厳格な隔たりを保つのが普通であったという「注」が添えられている。一緒に暮らしていてもこの有様なら那古野城から勝幡城までの約十二キロの距離は甘えを断ち切るには十分の距離といえそうである。

このフロイスの言葉を裏付けるかのように『武功夜話』には印陳打いんちんうちという遊びに耽る信長に土田氏（生母）が毎年決まった日にお金を送ってきたというエピソードが記されている。生き別れたわけでもないのにここまで他人行儀に徹する必要があるのか疑問である。

また『信長公記』にも、十三歳のとき元服の挨拶のために例の四家老を従えて古渡城に赴いた際信秀が盛大な祝宴を開いたと記されている。久しぶりに会った信長が信秀の想像以上に成長しているのに驚喜して労ったのではなからうか。以上のエピソードから両親とほとんど会っていなかった様子が伝わってくる。

信長はうつけの少年だったというのが通説のようであるが、果してこの少年のどこがうつけなのだろうか。うつけの少年に城主が務まるという見方はナンセンスではなからうか。事実うつけの評判が立つのは元服（十三歳）してから後のことであって少年時代の信長がうつけだったという記録は私の知る限りでは見たことがない。腕白ならよいといった身分の子でないことも考慮すべきである。さらに信秀・平手政秀のコンビが文武に秀でたつわものであったことも軽視してはならないだろう。この両雄の目に適ったことは「うつけ」を否定する重要な目安となる。

ではうつけでなければ秀才だったのかというと、そうではなく、これまで述べてきたとおり「見どころのある少年」だったというのが私の見解である。ここに信長の「信長」足る所以が示されている。見どころのある少年や青年はめったにいないものではないからである。この点を押さえないと、信秀の度を越した期待も狂気の沙汰としか映らないし、この試練を克服した信長の非凡さも理解できなくなる。信長のように若くして結果を残す傑出した人物ともなれば子供の頃から違っていた（優れていた）のは当然ではなからうか。

因みに横山住雄氏は『織田信長の系譜』（教育文化出版協会）のなかでこれまでの私の推理（想像でも構わないが）とまったく逆の見解を述べている。横山氏によると、信長は生れてからずっと家族と一緒に那古野城で暮らしていたという。つまり信秀が那古野城の初代の城主であり、信長は元服後に二代目の城主になったという説である。さらに天王坊は津島神社ではなく那古野城と隣接して建っていた天王社と安養寺の総称する寺であるという。この説を信じて「信長公記」の記録はまったくのでたらめということになってしまふのだが碩学の説だけに無下にはできない。重要な反証として提示しておくことにする。

青年時代

見どころのある少年だった信長がなぜうつけと罵られる青年と化したのか、おそらくこの問題はだれもが気になる点だと思う。史料を読むとこの兆候は元服前後から現れていたようである。『甲陽軍鑑』にその一例が載っているので引用する。

「織田信長公十三歳の年、寺に修行に行かれたけれども、さつぱり教義などを学ばなかった。立居ふるまいも悪く、修業中の同僚が食事をする時もそれを奪い取って自分が食べてしまうなど、さまざまな破廉恥行為は際限がない。そんなわけで法印（大和尚）も、もてあました。周囲の人もこの様子に、ものの役にたつまい、弾正忠（織田信秀）の子にしてはあまりに似つかわしくないと噂した」

この話を信じると元服前後にこの寺に通い怠けていたことになる。信長の元服は十三歳のときで、初陣は十四歳のときである。この二点に関しては申し分なく果たしていたとみられている。だとすると、単純に本業を優先してのことかも知れないが、この「不真面目な面」と「真面目の面」の二面性が次第に過激となり、まるで二重構造をなすかのように使い分けているふしが見られるとなると額面通りに受け取るのは危険である。

このことを雄弁に物語るのが『信長公記』の「青年信長の日常」という章である。幸い短い章なので全文引用することにする。

さて、平手政秀の働きで、織田三郎信長を齊藤山城守道三の婿とする縁組がととのい、道三の娘を尾張に迎えた。そんなこともあって、この頃はどの方面も平穩無事であった。

信長は十六・七・八の頃までは特にこれといった遊びにふけるこ

ともなく、馬術を朝夕に稽古し、また、三月から九月までは川で水練をした。泳ぎは達者であった。その頃、竹槍の訓練試合を見て、「いずれにせよ、槍は短くては具合が悪いようだ」と言つて、柄の長さを三間または三間半に揃えさせた。

その頃の信長の身なり・振るまいといえは。湯帷子ゆかたひらを袖脱ぎちやせんまけにして着、半袴。火打ち袋やら何やらたくさん身につけて、髪は茶筌鬚しゅさやそれを紅色とか萌黄色とかの糸で巻きたてて結び、朱鞘しゅさやの太刀を差していた。お付きの者には皆、朱色の武具を着るように命じ、市川大介を召し寄せて弓の稽古、橋本一巴いっばを師匠として鉄砲の稽古、平田三位を絶えず召し寄せて兵法の稽古、それに鷹狩りなど。

特に見苦しいこともあった。町中を歩きながら人目もはばからず、栗や柿はいうまでもなく瓜までかじり食い、町中で立ったまま餅を食い、人に寄りかかり、いつも人の肩にぶらさがつて歩いていた。その頃は世間一般に折り目正しいことが良いとされていた時代だったから、人々は信長を「大馬鹿者」としか言わなかった。『現代

語訳 信長公記 上』／太田牛一著／中川太一訳／新人物往来社

ここに激化した二面性の様子が描かれている。

「信長は十六・七・八の頃までは特にこれといった遊びにふけることもなく」とあり、これを前提に「その頃」として破天荒な素行と派手ないでたちについて述べている。したがって、「破天荒な素行」も、「派手ないでたち」も遊びと見なすのは早計である。事実スバルタ的な厳しい武芸と兵法の日課について詳しく述べている。信広・信勝といった兄弟たちが同じ日課をこなしていたとは思えない。信長自ら日課を組み、励んでいたとみる方が自然である。太田は安易に「人目もはばからず」と決め付けているが、これは「傍目」から見た心証であつて本人は人目を意識していたかもしれない。当然大馬鹿者呼ばわりされていることは知っていたにちがいない。にもかかわらず頑固に続けていたとなるとここには何らかの理由が考えられることになる。この理由と二面性は不可分の関係にある。よつて

この理由（動機）を探ることがこの謎は解くことにつながるはずである。

因みに青年時代の信長というとすぐに茶筌齋のいでたちで町をふらついているイメージを抱きがちだが、あの風采で過ごしていたのは「夏場の一時期」に過ぎないことは言うまでもないだろう。冬の凍てつくような酷寒の日もあの格好で外をうろついていたらそれこそ狂人である。合理主義者でプライドの高い信長がこんな目も当てられない無意味な醜態を理由も無しにするはずがない。書くだけ野暮なのは当時も同じだと思う。太田（『信長公記』の作者）もこの思いで省いたのではなからうか。

改めて先の二面性について。

武に徹していることから軍備を整えていたことがわかる。事実、親衛隊を組織し、鍛えていたといわれている。さらにこの当時はまだ珍しかった鉄砲に着目し、槍などの兵器の改善にも努めている。量より質を重視する姿勢が窺える。

この軍事改革は立場上避けられない決断だったはずである。この時期織田家のリーダー的な存在だった信秀が落ち目となっていたからである。信秀は織田家史上最大の版図（尾張、美濃の一部、三河の一部の三カ国）を切りひらいた功労者であったが、道三との戦いで破れ、これを機に織田家の結束が揺らぐなどして失意の底に落ちていた。ひよつとするとこれが原因で病に倒れていたかもしれない（急死とはどこにも書かれていない）、主だった動きも見せていないところをみると事実上の当主は信長であった可能性が有る（これを示す証文が見つかったている）。

このような状況で遊んでおられるはずがないだろう。信秀がそんな嫡男（後継者）を認めるはずがなく、家臣も納得するはずがない。時とき

代は戦国の世なのである。戦に負ければ奴隸として売られ、略奪・掠奪を目的に参戦する野蛮な兵士どもが女をさらひ弄ぶことが当たり前のような時代だったのである。さらにこの時代は慢性的な飢饉の時代でもあった。畑を荒らされることは死活問題となる。だれもが生きることに必死だった時代にうつけのどら息子の後始末の苦勞を好んで買う物好きがいるはずがない。織田家の新体制が叫ばれていたにちがいないのである。

このように時代的に捉えてゆくと、わざと危ない橋を作つて渡つていくように映る。あからさまに不評の原因（不真面目）を作りながら真面目な面は秘匿をするという奇妙な構図である。L・フロイスは『日本史』の中で「彼は自らに加えられた侮辱に対しては懲罰せずにはおかなかつた」と記している。だとするとこの奇妙な構図の裡には信長の知恵（戦略）が隠されていると捉えないと信長の怒りの矛先の行き場が無くなつてしまう。理由もなしに大馬鹿者呼ばわりされて黙つていようでは「信長」とはいえない。この二面性は戦略上の戦術という見方が採れそうである。

ここで参考になるのが竜馬の写真である。坂本竜馬というとだれもがすぐにあのトレードマークのブーツを履いて颯爽と立つ有名な写真を思い浮かべるはずである。

さてあの写真についてだが、あの写真を見ると、あのポーズを「意図的に作つて」撮つた写真であることがわかる。あの格好で町に出ればすぐに「坂本竜馬」とわかつてしまふのだから命を狙われている竜馬があの格好で出歩くはずがない。恰も逃走中の凶悪犯がトレードマークのモヒカンで町をうろつくようなものである。他にもブーツを履いた写真が現存するが、この写真の竜馬は座っており、しかも大小を差している。この写真ではイメージと合わなかつたのであの写真が生れたのだと思う。

ではあの写真の用途は何だったのだろうか。

おそらく竜馬は写真が「商売」に使えることを知っていたのである。別に竜馬の独創というわけではなくT・グラバーなどの外国人から「パンフレット」や「ポスター」の存在を知らされてヒントを得たにちがいない。著名な志士である自分の写真を利用して海援隊の宣伝するのが目的だったのだと思う。つまりわれわれがああ写真を見て「おもしろい」と思うようにあの時代の人々（面識のない有力者）にもそう思っていて欲しかったのである。竜馬に関心が湧けば海援隊の隊長であることに気付くだろうし、そうすれば利益に繋がるかも知れないという算段である。

よって、あのよれよれの服装もわざとくたびれた服を選んで（そのようにして）着たのであり、目を細めて遠くをみるあの印象的な表情も「海（夢もしくは大志）」を意識した表現であり、そして、鬚を総髪にし、太刀を抜くことで新しい日本人であることを印象付けるとともに、ブーツを履くことでコスモポリタンな男であることを主張するのがコンセプトであったにちがいない。このことは肘がちようど付く小さめの机を用意していることからも気付くことである。大きい机では被写体の竜馬が引き立たなくなるのでこのような設定となったのである。服装のチェックをこまめにし、鏡の前で何度もあのポーズの確認をとり、カメラマン（上野彦馬）と綿密に打ち合わせながら本番に入る竜馬の姿が見えるようである。

信長のうつけもこれと似ている。ブーツ＝茶筌髷、よれよれの服と袴＝湯帷子ゆかたびらのだらしない着方と半袴、太刀を抜くこと＝朱鞘しゅせうの太刀を差すこと、など要所に似た演出がみられる。個人的な嗜好でやっているのであれば側近に決まった派手な武具を着せる（揃える）必要はないはずである。

しかしながら竜馬とは逆に悪い印象を与えるための策だとすると俄かに大石（内蔵助）の影が浮んでくる。対外的にはうつけ（昼行灯）を装いながら着実に戦備を整え、時を見計らって目的を果たすという大石的な両面策である。

このことは尾張統一戦における「大儀」に如実に表れている。おもしろいことにそのほとんどがその強気な性格に反し受け身の姿勢で臨んでいる。たとえば信秀の死後（家督を相続後）最初に戦火を交えたのは山口左馬助と九郎次郎という鳴海城主の親子であった（赤塚の戦い）。山口左馬助は信秀の恩顧を受けた中途採用的な重臣であったが、信秀が死ぬと今川氏に寝返り、今川勢を自身の勢力圏に引き入れるという恐れ入った態度を取り始めたのである。こうなれば信長もこれを阻止するための行動に出ざるを得ない。両軍は赤塚という場所で激突した。信長軍が八百、山口軍が千五百であったという。結局信長は烈しい戦いのすえ引き分けている。

さてこの経緯をみるとやはり信長のうつけが原因だったようである。山口親子は信長ではもたないと判断して今川氏に寝返ったという。これこそ信長の望み通りの展開だったにちがいない。不満分子を肅正するには討つのが一番確実で無難である。また自分の強さ（能力）を周囲に誇示する絶好の機会ともなる。事実信長は相手の半数程度の兵力で引き分けている。山口親子は当然この戦力差も踏まえて拳兵したのであるが、信長が意外に強くて事を仕損じたにちがいない。

これが信長の二度目の実戦である。二度目でこの兵力差を跳ね返した手腕は高く評価すべきだろう。家臣たちでさえこの結果に驚いていたのではなからうか。信長は実戦で鍛えなければ兵が強くないことを知り抜いていたはずである。研修ばかりして仕事をしないのでは話にならない。信長が鍛えた親衛隊がまるで魔法にでもかか

つたかのように活躍しなければこの兵力差を跳ね返すことは無理である。尾張統一戦の中で信長の怒号に相手方の兵士が腰を抜かしたという一幕があるが常にこの気合で兵を叱咤し、考案した兵器と戦術を武器に自ら先頭に立つて鬼神のように奮戦していたと想像する。結局山口親子は強かな謀略で始末しているが、山口親子にすれば馬鹿にしてやられたといった思いも寄らぬ無念な最期であったのではなからうか。

この戦は明らかに山口親子に非があるように映る。だれに従うかは自由であつてもその時代の作法に反した自由は認められない。要は大儀なのである。その大儀が「うつけ」ではあの子が嫌いだといつてぐずる子供の愚痴と変らないだろう。人が利害関係で動くのはこの時代も同じである。当然かれらもこれを主に動いたのであるうが、どうしてもうつけが原因のように映ってしまう（受け取られてしまふ）。大儀がうつけにすり替わるようお膳立てがされていたからである。うつけが原因と見られるように仕組まれていたのである。「うつけ」はこのための布石であつたと捉えないと脈絡を欠くことになる。事実信長は討ち果たせなかつたものの評価をあげる成果を上げている。うつけにできることではないのだから「うつけ」とみるのは不合理である。

この後の戦も同様である。この約四カ月後に尾張下四郡の守護代で清洲城主であつた織田信友の家宰坂井大膳と戦っている（信友は信長の主筋に当たる）。これも身内（織田家の者）を人質にして攻められたので迎え討つという体裁（大義）をとっている（海津の戦い）。このときは叔父の信光の援軍を得て撃退している。いつの間にか叔父の一人と誼を結んでいたのである。この約一年後に信友と直接対決し、致命的な打撃を加えている（安食の戦い）。この戦も信友が守護の斯波義統を自刃させたことに端を発した義勇の拳兵である。つまりこの事件は尾張国内で起こつた下剋上である。信長はこの非

常事態に対し義統の嫡男義銀が頼ってきたことを大義に信友討伐の狼煙を上げている。赤穂浪士的な主君の仇を討つという堂々たる大義をもって自身の下剋上の件（主筋の信友討伐）を正当化しているのである。

結局信長はこの約十カ月後に信光と謀って信友を自刃させている。これで念願だった清洲城主となり尾張半国の守護代の地位に相当する力を手に入れたのである。これも先の大義の結果なので信長に非があるとは思われていない。因みに斯波義銀（尾張の守護）は後に信長の傀儡的な扱いに不満をもって挙兵したものの失敗して尾張から追放されている。この追放劇も足利義昭のときと同様下剋上と見なされていなかったようである。身の程を知らぬ幼さが下剋上とするには憚れたからかも知れない。

以上が尾張統一戦の一例である。

うつけの振る舞いがなければ、尾張の動向も、信長の前途も違っていたはずである。ならば尾張統一戦の全過程に「うつけ」が遠因として関わっていたという見方が成り立つことになる。このことから以下の見方が採れると思う。

- ・ 信秀の葬儀のときの悪態は尾張統一戦の宣戦布告であった可能性が高いこと
- ・ 情報通であった信長なら周囲の動向（情報）を事前に掴んでいた可能性があること
- ・ うつけは戦略上の戦術であって真正銘のうつけではなかったこと
- ・ 少年時代の教訓を見事に活かしていること
- ・ 尾張の統一を果たし、尾張の支配者になるのが信長の彼岸であったこと
- ・ カリスマがこの一連の経緯の原動力となり、類例のないカリスマ

的指導者像を打ち立てようとする意識的且つ無意識的な欲求と衝動が働いていた可能性があることである。

ここで本題に戻ると、以上の推理から「うつけ」どころか「本物」に成っていたというのが私の結論である。ここに特出した早熟の才の軌跡が刻まれている。信長を甘く見たのが彼らの命取りになったのである。

以上の推理を「証明」するのが有名な道三との会見である。

残念ながらこの会見についても長篠の合戦同様の奇妙な解釈が為されていると思う。例えば、会見の場でうつけの衣装を着替えたことで道三がうつけでないことに気付いたとか、長い槍と鉄砲の数を見て感心して見直した、といった単純な解釈である。

会見の席で着替ええないのでは何しにきたのか分からないし（「同盟」関係を築くのが信長の目的である）、槍や鉄砲に感心したのであれば自分もみならえばよいことであって、道三ほどのつわものがこの程度のことです「敵」に心酔したり、自分の領土を譲るとまでほれ込むはずがないのにこれが通説のようになってるのが実情である。現実はずっと厳しく怖いものではなからうか。この点も踏まえて次はこの件を取り上げることにする。

道三との会見

まずは道三との会見の章の確認から始めことにする。以下が「信長公記」の章の全文である。

〔天文二十二年〕四月下旬のことである。

齊藤山城守道三から、「富田の寺内町正徳寺まで出向きますので、織田上総介殿もここまでお出でくだされば幸いです。対面いたしたい」と言ってきた。そのわけは、近頃、信長を妬んで（そねんで）、「婿殿は大馬鹿者ですぞ」と人々が道三に面と向かって言っていた。人々がそう言うと、「いや、馬鹿ではないのだ」と道三はいつも言っていたのだが、対面して、その真偽を見きわめるのだ、と聞こえてきた。

信長は遠慮もせずに承諾し、木曾川・飛驒川という大川を船で渡り、出かけて行った。富田という所は人家が七百軒ほどあって、豊かな所である。正徳寺へは大阪の本山から代理の住職を派遣してもらい、美濃・尾張両国の守護の許可状を取って税を免除されている所である。

齊藤道三の計画は、信長は実直でない男だという噂だから、驚かせて笑ってやるう、ということ、古老の者七、八百人ほどに折り目正しい肩衣・袴・上品な身支度をさせて正徳寺の御堂の縁に並んで座らせ、その前を信長が通るように準備した。その上で、道三は町はずれの小屋に隠れて、信長の行列を覗き見した。

その時の信長の出で立ちは、髪は茶筌鬚を萌黄色の平打ち紐で巻き立てて、湯帷子を袖脱ぎにし、金銀飾りの太刀・脇差二つとも長い柄を藁縄で巻き、太い麻縄を腕輪にし、腰の周りには猿廻しのように火打ち袋、瓢箪七つ八つほどをぶらさげ、虎皮と豹皮を四色に染め分けた半袴をはいた。お供の衆を七、八百人ほど、ずらっと並べ、柄三間半の朱槍愚百本、弓、鉄砲五百挺を持たせ、元気な足輕

を行列の前に走らせた。

宿舎の寺に着いたところで、屏風を引きまわし、生れて初めて髪を折り曲げに結び、いつ染めておいたか知る人のない褐色の長袴をはき、これも人に知らせず拵えて（こしらえて）おいた小刀を差し、この身支度を家中の人々は見えて、「さては、近頃の阿呆ぶりは、わざと装っていたのだな・肝をつぶし、誰もが次第に事情を了解した。

しばらくして、屏風をおしのけて道三が出て来た。それでもまだ知らん顔をしていたので、堀田道空が近づき、「こちらが山城守でございます」と言つと、「お出になつたか」と言つて敷居の内に入り、道三に挨拶して、そのまま座敷に座つた。そのうち、道空が湯漬けを給任した。互いに盃をかわし、道三との対面はとどこおりなくお開きとなつた。道三はにが虫をかみつぶしたような様子で、「また近いうちにお目にかかろう」と言つて席を立つた。

道三が帰るのを、信長は二十町ほど見送つた。その時、斉藤勢の槍は短く、信長勢の槍は長く、それを掲げ立てて行列して行つたのを道三は見えて、おもしろくなさそうな顔で、ものも言わずに帰つて行つた。

途中、あかなへ茜部という所で、猪子高就が斉藤道三に、「どう見ても信長殿は阿呆でございますな」と言つた。道三は「だから無念だ。この道三の息子どもは、必ずあの阿呆の門前に馬をつなぐことになる」とだけ言つた。『現代語訳 信長公記 上』／太田牛一著／中川太一訳／新人物往来社）

この章を読むと道三から会見を申し入れがあつたことがわかる。そしてその目的を大馬鹿者の噂の真相を確かめるためとしている。この無礼な申し入れに対し信長は「遠慮もせず承諾した」という。受けて立つというわけである。この道三の申し出はうつつけの問題を代弁している。よつて信長の出方（返答）をみればうつつけの問題もこれではつきりするにちがいない。

ではなぜこのオファーを受けたのだろうか。首を長くして待っていたからである。尾張を統一するためには道三の援助は不可欠な要素となる。いくら自信や策があっても現状は薄氷を踏むようなもろい磐石に立っているに過ぎない。ドングリの背比べのような身内を頼ったところでたかが知れている。これに引き換え道三は美濃一国を支配する堂々たる戦国大名である。幸い道三とは婿と舅の縁者の関係にある。織田家のだれよりも深い縁で結ばれている。しかもこの実力者が隣国に居るのであればこの縁を使わない手はないだろう。事実この会見に懸ける信長の意気込みは「いつ染めておいたか知る人のない褐色の長袴をはき、これも人に知らせず捲えて（こしらえて）おいた小刀を差した」というくだりに表われている。信長は「彼は戦運が己に背いても心気広潤、忍耐強かった」（『日本史』／L・フロイス著）という。このときも四面楚歌の状況にありながら道三から打診が来るのを辛抱強く待つていたにちがいない。

この程度の機微に疎い道三ではないだろう。この縁を使わなければ道三の娘（信長の妻）を娶った意味が無くなってしまふ。道三は殊勝にも面識のない信長のことを気にかけていたようである。これを裏付ける次の手紙が残されているという。

織田の家中がごたごたしている由だが、捨て置かずに調停してやってほしい。また使者を以て考えを聞かせてほしい。三郎殿様は若年だから、いろいろと苦労しているだろうとお察しする。『歴史読本』

特集 怒涛！ 信長戦記 「猜疑の刃 尾張平定」 熱田公著

これは信長の大伯父（秀敏）への返信の手紙らしいが気にかけている様子が伝わってくる。

だが両者の縁組は和睦を誓った政略結婚であってこれ以上のもので

はない。一種の不可侵条的なもので軍事同盟でないのが実情である。よって道三には義理はあつても信長を助ける義務はない。

ではこのような状況で援助を請うとどうなるのだろうか。対等な関係は難しいはずである。対等の軍事同盟を結ぶにはあまりにも道三との力の差がありすぎて話にならない。また弱音を吐けば見損なわれるのは必至である。相手は乱世に一代で大国の主に申し上った「まむし」と恐れられる梟雄なのである。道三に婿と舅の浪花節的な甘えは通じないだろう。となれば織田弾正忠家の当主として堂々と外交として臨みその場で道三の心をつかむほかない。相手に不利な条件を呑ませるだけの馬鹿でない証を立てることで「人物」を担保に手を握らせるしか手が無いからである。

道三はこの事情を察していたからこそ信長の体面を立てて自分の方から申し込んでいたのである。尾張を乗っ取るつもりなら心配するはずがない（先の手紙を参照）。だが道三は信長と会うのに婿の甘えを許さない方針を固めていた。だからこそ軍事同盟を結ぶ絶対条件として「会って馬鹿でない証を立てる、同盟はその後に判断する」というメッセージを暗喩に吹聴しているのである（「聞こえてきた」とあることの敷衍）。信長もこの意図を理解していたからこそ遠慮なく承諾しているのである。これは前哨戦的な外交の駆け引きがあったことを物語っている。

とはいっても時代は戦国の世である。勝手な思い込みで面識のない相手に心を許すほど牧歌的な時世ではない。治外法権の地を会見場所を選んでいるはこのためである。このことから会見に臨む両家のびりびりした雰囲気伝わってくる。

さて信長である。

その後の始末を読むと信長が一世一代の大勝負に出ていたことが分

かる。まるでランボオの、

まあいい、思いつく限りの仮面をかぶってやる（『地獄の季節』）

という言葉を体現するかのようにつつけの総決算ともいえる凄まじい格好で臨んでいる。『武功夜話』によるとド派手な衣装の背には男根の絵が描かれていたという。この衣装がこの大仕事に臨む信長の勝負服だったのである（本当の勝負服は衣替えしたときの衣装だったことは言うまでもない）。L・フロイスは「困難な企てに着手するに当ってははなはだ大胆不敵で」（『日本史』/L・フロイス著）と記している。このときもこの気質が激しくたぎってこの有様となったにちがいない。

この信長の意気込みとは裏腹に家臣たちは道三と会つのを恐れていたように思う。次の『信長公記』のくだりがその根拠である。

齊藤道三は、小さな罪を犯した者を牛裂きの刑に処したり、あるいは、大釜を据えて、その妻や親兄弟に火を焚かせて罪人を煮殺したりという、実に残忍な処刑をした。

また道三の非道を詰る落書が尾張の至る所に貼られていたという。こんな魔物のような冷血漢と会つのに何を考えているのかわけの分からない主人に従って行くのである。前途に不安を覚えぬ者がいるのだろうか。

話を本筋に戻すと、うつつけの噂の真相を見極めさせてもらおうとわざわざ断ってきている以上そのための小細工を仕掛けてくることは予測がつく。会うだけでなく試せばより良く分かるのが道理である。また会見以外の様子（情報）も知りたいと思うのが人情である。事実道三はこれをしたのである。笑いものにするための準備をし、覗

き見したと記されている。

チンピラのような衣装の魂胆を道三はすぐに見抜いたはずである。仕掛けている本人が気づかないのでは話にならない。この場面は会見前から品定めの腹の探り合いがあったことを示している。「やるな」とほくそ笑む道三の顔が目に見えるようである。

同様に多くの銃と槍を携えてきたことには感心したはずである。これがおれの持ち物（武器・兵器）のすべてです、と探られたくない腹を道三にだけには見せるといふ誠意の表れなのだから気を悪くするはずがない。

寺で着替えることもすぐに見破ったはずである。仮に着替えないとどういうことになるのか。道三はちゃんと正装で遇しているのにそれを茶化すかのように「おれが信長です」といったふざけた態度で応じるのであればその場でたたき切ってもだれも文句を言わないはずである。まさに救いようのない馬鹿だったということでは舞いである。

だが信用という点では半信半疑だったと推測する。信長にすれば道三の前で着替えることは兜を脱ぐのと同じである。拙い意地を貫くこともないとはいえない。道三はこの点を重視しているのである。ここで「おれ流」を捨てられるか（大人に成れるか）、それとも織田弾正忠家の当主の自覚を持って政治的な配慮を図れるかは噂の真相（信長の器量）を知る重要な手掛かりとなる。この行方は同盟を結ぶうえで譲れない条件となるにちがいない。道三は信長がこの高いハードルを越えることを期待してこの会見を申し込んでいるのである。

屏風を引きまわしてなにやらごそごそやっているという知らせはす

ぐに道三の下に届いたはずである。衣装を改めるための小細工であることはすぐに察したにちがいない。ならば後は婿と舅のご対面の席で手と手を握り合って爆笑し、腹の探りあいの種明かしをしながら互いの検討を称え合って知己を結べばこの会見の趣旨は満たされる。道三は信長がこう来ると期待して会見に臨んだにちがいないのである。

ところがいざ屏風をおしのけて会ってみると、信長なる男は道三の差し出す手を払い退けるかのようにそっぽを向いて無視している。柱にもたれかかっていたという説がある。道三が来たことに気付いているはずなのにそれでも気付かぬ様子ふりをして悪態をついている。堀田道空が機転を利かして取り繕っても「デアルカ（お出になつたか）」という横柄な態度をとる始末である。道三は、おや？ と思つたにちがいない。さらに会見が始まつても一向に同盟の件を持ち出そうとはせず「とどこおりなく」事を進めている。「にが虫をかみつぶしたような様子」というくだりに道三の性格と思いが如実に表われている。露骨に不愉快な表情を浮かべていたということである。「また近いうちにお目にかかるう」と言つて席を立つたときは好意を踏みにじられたような不快な念を噛み締めていたことは想像に難くないだろう。

よつてこの会見の席では「答え」を出さなかつたのである。これでは、馬鹿か、馬鹿でないかの判断が付かない。だとするとこの後に何かが起つたのである。正確にはなにかをしたのだ。現時点で道三の評価を改めさせることを何もしていない以上このように解釈せざるを得ない。では何をしたのだろうか。この疑問に答えるのがこの後の展開なのである。

信長は道三を「二十町ほど見送つた」という。二十町というと約21〜2キロの距離となる（一町は109.0909mである）。か

なりの距離を見送ったといえそうである。道三は『また近いうちにお目にかかるう』と言って去っているのだから見送る義務はない。用がなければこの方が気を使わずに済むともいえる。だとすると信長の方から見送らせて欲しいと申し出たとみるのが自然である。

因みに帰る際は元のうつけの格好に戻っていたはずである。長袴とは浅野内匠頭が吉良上野介を切りつけたときに履いていたような裾の長い袴とみられている。合理主義者の信長がこんな不合理な格好で馬に乗るとは考えられない。また元の格好で尾張に戻らなければ信長の面子は潰れてしまう。だとすると男根の入った衣装で道三を迎えたのである。「どう見ても信長殿は阿呆でございますな」という側近の最後の言葉にこのときの斉藤側の呆れ果てた思いを読み取ることができる。次第に信長のペースに巻き込んでゆく様子が窺える。

さてここで問題となるのは道三がどのような状況に置かれていたかということである。先の引用にあるように信長は「お供の衆を七、八百人ほど、ずらつと並べ、柄三間半の朱槍愚百本、弓、鉄砲五百挺を持たせ、元気な足軽を行列の前に走らせた」という隊列で会見に臨んでいた。ならば帰りも同じ軍容で帰ったとみるのが自然である。だとすると信長の前に居たのは足軽だったことになる。足軽なら銃を持っていても不自然ではない。信長の後方には多くの銃と長い槍を持った兵士が従っているという状況で事（見送り）は進められていたのである。

この間道三は信長と馬を並べながら雑談を交わしていたと想像する。この想像的推理に立つと道三は信長の軍に挟まれていたことになる。これに引き換え道三の部隊は「古老の者」が主力であった（信長を笑い者にするために「古老の者」を多く引き連れてきていたと記されている）。先の重臣の言葉から油断していた様子が窺える。これ

では仮に信長と同じ隊列を組んでも力の差は歴然としている。信長はこのような状況を作って約2・2キロも見送っていたのである。

この距離と時間があれば道三なら事の重大さに気付くのではなからうか。信長がひょいと合図をすればとたんに鉄砲が自分に向かつて火を吹くことを。またあの長い槍が自分を突き刺すであろうことも火縄銃はすぐには使えない。ならばある場所を目印に撃つよう命じられていることも考えられる。思えば援助を請うより道三の首を上げる方が利になつているともいえる。適うかどうか分からない軍事同盟に賭けるよりこの場で道三の首を上げる方が得という見方が採れる。また道三は舅であつても親父（信秀）の信用を奪つた仇でもある。この恨みを晴らすつもりでいてもおかしくないのである。

要するに道三は桶狭間のときの今川義元と似たような状況に置かれていたのである。気がついたらいつの間にか逃げ場のない状況となつており、ヒ首を首に突きつけられたような絶体絶命の状況に陥っていた。道三の長い人生で初めて経験する深刻な事態だったのではなからうか。気付かぬ振りをしながら信長の様子を窺い、運を天に任せるしか手がないという状況だつたとみて差し支えないだろう。

結局信長は道三の首を上げずに別れている。

道三は「おもしろくなさそうな顔で、ものも言わずに帰って行つた」といつ。

「カリダゾ、ワカッテイルナ」

という信長のメッセージを重く受け止めていたからである。これが、お前の首などいつでも取れるんだ、という強烈な矜持であることも悟つたにちがいない。

「ものも言わずに帰って行った」のは「ものを言えなくなる事態」が起きたことを意味している。槍の長さの違いは覗き見した段階で気付いていたはずである。観れば人目で分かることなのだから覗き見したのであれば気付かぬことは考えられない。

それを改めて取り上げられているからにはこの違いを深刻に受け止める何事かがこの間に起きたことを意味している。覗き見の一件はこのメッセージのために貼られた付箋と解釈しないとその後の道三の変化（軍事的な援助をする）の説明が付かないことからこの見方（解釈）は成り立つのである。

以上がこの会見についての私の推理である。

このとき道三は59、信長は20歳はたむであった。この年齢差を考えれば道三の驚き（ショック）の程が知れると思う。密かに英雄を自負していたであろう道三が娘婿の20歳はたむちの若造に子供のようにあしらわれたのである。「この道三の息子どもは、必ずあの阿呆の門前に馬をつなぐことになる」という結びの予言的な言葉に道三の気持ち（評価）がよく表われている。「あの阿呆」とは驚異的な大物という思いを「変わり者」に見立てて表現した揶揄である。

事実信長がしたことは広域暴力団の組長のハゲ頭を公然と叩いて立ち去るようなものなのである。道三を怒らせればただ事で済むはずがない。道三が尾張の反信長勢力や今川氏と手を結べば信長はひとたまりもなく破滅する。

それなのにまったく動じることなく平然とこれを成し、さらに組長（道三）の心をつかむ知恵を働かせて好転フライドさせている。相手の器量を奪うような「借り」をつくることで相手の弱みを握り、この弱味を秘匿することで（面子を守秘するで）自分の望むを果たすよう強要しているのである。

こんな真似が馬鹿にできるわけがないだろう。よほどの度胸と自信と頭脳がなければできないことではない。ここに仮面を取った信長が描かれている。見栄（道三の首を上げたことによる名声や評価）より実（軍事的援助への賭け）に拘った点は若いのに大したものである。「英雄は英雄を知る」という箴言ことばに賭けたことが勝因にちがいない。

以上が私の推理である。

平手政秀について

ところで平手政秀の存在を抜きに信長の青年時代は語れないだろう。信長の傅役（養育係）だったのだから当然である。信長はかれの担当中にうつけと見られるようになっていた。だとすると、平手が傅役でなければこのような羽目（とむ）にならなかつたという見方が成り立つことになる。平手の養育が不十分だったことを示す証拠は無く、手を焼いていたかも定かでない。平手という「爺」のニックネームで親しまれているが、これは史料に無い想像の産物に過ぎないのが実情である。

自刃の件も注意を要するだろう。平手は信長の養育係であつてこれ以上の者でも以下の者でもない。その平手が信秀の死後信長が実直でないのを苦に自殺したという。これが自刃の理由なら信秀の生前の方が深刻だったはずである。なのに信長が家督を継いでしばらくしてから（役目を終えたから）自害している。守り立ててきた甲斐がないといつて死んだというが、一人で守り立てていたとは考えられない。「一人で」という慢心が死を招いたのだろうか。まるで親であるかのように思い詰めているが、信長は傅役の自惚れに付き合うほどおぼこでなかつたはずである。この理由では人並みに罪悪心を覚えることがあつても、号泣はありえないだろう。これは明らかに信長のキツイ性格を無視した不合理な解釈である。ではいったい何が起きたのだろうか。私の推理は以下のとおりである。

まずは平手の年譜を載せるので一瞥してほしい。

明応元年（1492）

誕生

明応三年（1494）

齊藤道三誕生

永正七年（1510）

信秀誕生。なお永正八年、九年説の諸

説あり

享祿三年（1530） 信秀家督を継ぐ諸説 信秀の家老となる

天文元年（1532） 信秀、今川氏豊から那古野城を奪う

天文二年（1533） 公家の山科言継が政秀邸に泊まった際

政秀の人物と屋敷を称賛する 和歌会の際には文芸の造詣の深さを示している

天文三年（1534） 信長誕生 信長の家老となる

天文二十年（1551） 信長家督を継ぐ諸説あり

天文七年（1538） 信定死去 諸説あり

天文九年（1540） 伊勢神宮外宮造営のための寄進に尽力する

天文十二年（1543） 信秀が皇居修理のために四千貫文を搬

出したとき信秀の名代として上洛し献上している

天文十五年（1546） 信長元服

天文十六年（1547） 信長初陣。

天文十八年（1549） 信長と道三の娘（濃姫、帰蝶）の婚姻

のために奔走、成立させる

同年秋 清須守護代織田信友と信秀との和睦を

成立させる

天文二十一年（1552） 信秀死去。 信長が家督を相続。 諸説あり

天文二十二年（1553） 自刃する 享年六十二

この年譜を見ると、道三より約二歳上、信秀より約十八歳年長だったことがわかる。父は経秀といい、祖父は英秀であり、いずれも春日井郡小木村・志賀村両城主であったという。横山住雄氏は所在地が史実と合わないとして勝幡城のすぐ北の長福寺付近に居宅を構えていたという説を唱えている（『織田信長の系譜』／横山住雄著／教育出版文化協会）。所在地の件は置くとして、信定（信長の祖父）、信秀、信長の三代に渡って織田弾正忠家に仕えた生え抜きの忠臣

だったことは確かなようである。一般的には、信秀・信長の二代という見方が為されているが、信秀より十八歳上であることをおもうと信定の代から仕えていたとみるのが自然である。穿った解釈をすると、信秀の信頼が厚いのは信長同様信秀の面倒を見た時期があったからかも知れない。まさに織田弾正忠家一筋の「爺」的な存在だったにちがいない。

平手政秀は、和歌・茶湯に長じるインテリで、経済や外交にも明るい万能的な教養人であった。皇室との交渉役を果たしていることからコネと作法の知識があつたことがわかる。尾張の守護代の重臣の家臣の身分にしては稀有なスキルといえるだろう。特に濃姫と信長の婚約を取りまとめた件が有名である。このときは信秀の方が分が悪かつたにもかかわらず見事に大任を果たしている。たいへんな資産家でもあり、生真面目な性格であつたという（『織田信長の系譜』／横山住雄著／教育出版文化協会）。武功が見当たらないことから官僚タイプの事務方専門の重臣のように映りがちだが、信長の初陣の補佐役を務めているところをみると軍師の面も具えていたようである。個人的には米内光政タイプの「偉大なる凡人」的な人物（武士）として捉えている。

ある部下の証言によると、米内光政は、ああしろ、こうしろ、ということは一切言わず、あれをしてはならない、これをしてはならない、とも言わなかつたそうである。

次に両者の関係についてふれることにする。

次のくだりを読むと、平手が気弱な爺ではなく信長に協力的な傅役だったことがわかる。

信長は十六・七・八の頃までは特にこれといった遊びにふけることもなく、馬術を朝夕に稽古し、また、三月から九月までは川で水練

をした。

また、市川大介を召し寄せて弓の稽古、橋本一巴いっばを師匠として鉄砲の稽古、平田三位を絶えず召し寄せて兵法の稽古、それに鷹狩りなどをした。

養育係の平手を無視してこのような日課が組めるとは考えられない。また当時の信長に一存で決められる力があつたとも思えない。当然信秀の許可を得てから平手が手はずを整えたはずである。織田家の顔的な外交官でもあつた平手が信長のためにすべてを仕切つたと捉えないと傳役の用がなくなってしまう。信長の考えに反対したり、おろおろしてばかりいる無能で目障りな養育係を信長が許すはずがない。逆に信長を理解し、協力的でかつ有能な味方だつたからこそ慕つていたのである。うつけの素行にしても理解がないと衝突するのは必至である。よって理解を示していたとみるのが妥当である。

改めて平手について。

平手がいかに献身的な傳役であつたかは信長の多彩なスキルから窺い知ることが出来る。信長も平手同様、経済、外交、茶湯、軍事等の広い才能を示している。この背景に平手の指導と鞭撻が無いかのような見方は平手に酷である。バカ殿とバカ殿に仕える健気な老臣の關係の方がアレキサンダーとアリストテレスの小型的な小難しい見方をするより面白いかも知れないが、「生真面目な性格」という両者の共通点を考慮すると後者の方が史実に近いと思う。

以上のようにシビアに考察すると、信秀の生前には、問題はないようである。信長はあくまでも信秀の後継者候補のひとりに過ぎず、平手も信秀の家臣のひとりであることから互いに理性を働かせて信秀の逆鱗に触れぬよう努めていたからにちがいない。

では何が起爆剤となったのだろうか。

私は天道思想がそれであったとみている。天道思想と「人生五十年」という敦盛（幸若舞）の台詞が両輪となって「天下人になる」という思いも寄らない志を抱かせる羽目になったのだと思う。

天道思想はカリスマとともに信長の「力学」を知る重要な要素である。端的にいうと、信長は桶狭間の勝利で己のカリスマの顕現に成功した後、そのカリスマ像と数々の実績を武器に天皇と天皇のカリスマ性を取って代わる「天下人」という新たなカリスマ的指導者となって世直しをする野望に燃えていた（抱いていた）。そしてこの野望を正当化する大義として天道思想に着目し、これを独自の思想に取り込むことで名文化を図り、それを正義として標榜することで公私の折り合いをつけていたのである（カリスマと自身の折り合いも含まれる）。つまりいたずらに侵略戦争を推し進めていたわけではなくこの考えに基づいて「天下布武」の実現を目指していたのである。

儒学が天道思想の源流にあり、禅宗とも密接な関係にあることは天道思想の基本である。したがって天道思想を説くには禅の知識が不可欠となるのだが、私は禅の経験がなく、またする気もないのでこの教義について語る資格がない。このことは専門書を読むだけで弾いたことのない初心者からギターを習うのと理屈は一緒である。護摩を焚いたことのない者に空海の秘教がわかるだろうか。私は個人的にこの手の実証的でない試みは馬鹿げていると思っている。むしろ思考実験は大事だが、経験がそれ以上に大事なことは鉄則である。要するに私も信長同様仏教が嫌いなため、読みたくも、知りたくもないのだが避けて通れないのが現状である。

幸い戦国時代の天道思想については石毛忠氏の優れた著作がある。奇しくも石田氏はその書の中で「織豊政権と『天道』思想」という

項目を設けて鋭い洞察を利かせている。特に信長の「肉声」「天」と「天道」について語った史料」を取り上げている点が貴重である。このほかにも小島毅氏の研究も挙げられるが、石毛氏の次のふたつのくだりを引用すればこの難所は押さえられると思う（私は信長を意識して要点だけを言うよう心掛けている）。それらの解説は平手の死とも大きく関わってくるので重要である。子供染みたことをいって恐縮だが以上の次第なのでこの点を留意して以下のくだりを通読してほしい。

室町幕府の政治原理にはふたつの側面があった。それは撫民仁政主義と故実礼治主義であり、両者とも室町幕府の政治要綱である『建武式目』にはつきりと謳われている。まず撫民仁政主義は「天下」思想 儒教の敬天思想（天意の反映である民意の支持を為政者たるの有効要件とし、為政者を交替する放伐革命を是認する）に立脚し、天下は天下の天下であると主張して、安民・保民を政治の要訣とする。『基づくもので、承久の乱以来超越的な「王土」思想 天下も天下の民もすべて王土・王民であるから、王土に孕まれた王民たる者は王（天皇）に絶対服従すべきだと主張する」と対決し、武家政治を正当化してきたものである。一方、故実礼治主義は公武社会における先例・典拠を重んじる精神に支えられるもので、これによって故実に依拠し、儀礼を重視する室町時代特有の故実的政治世界が形成された。

承久の乱以来、武家政権が正当化してきた「天下」思想、「天」の思想 超越的な「王土」思想を退け、撫民仁政を求め、政権ないし主権者の交替をジャステイファイする」と、南北朝内乱期以降顕著になった双務契約的な主従観念こそ下剋上正当化の論理を構成する二大要素であり、両者がいわば共鳴しあいながら、形骸化した室町的故実世界を崩壊に導き、新秩序の胎動を促したということができよう。実力主義の精神に支えられていたであろうが、その下剋上の

正当性を主張する場合には、どうしても上述した「天下」思想「天」の思想に頼らざるをえなかったのである。「戦国・安土桃山時代の倫理思想―『天道』思想の展開」(体系日本史叢書23 思想史? / 山川出版社、日本における倫理思想の展開 / 日本思想史研究会 / 吉川弘文館)

以上のくだりを読むと、王土思想と天道思想の違い、撫民仁政主義と故実礼治主義の違いがわかると思う。要約すると、王(天皇)の利己的な独裁体制に絶対服従を強制する政治原理が王土思想であり、民意(天意)に支持された為政者がその意を実現する(司る)政治原理が天道(天下)思想である、と区別できる。撫民仁政主義と故実礼治主義については文字通りに解釈すればよいので説明は不要と思う。

さて先の石毛氏の文章を読むと、故実礼治主義と信秀・政秀の考えが似ていることに気づくのではなからうか。公家を尾張に招いて和歌や蹴鞠や指導を受けたり、巨額な献金をしたりと皇室に比重を置いた政策をとっている。実力では斯波氏を凌ぎながら下剋上に踏み切らないのもこの一貫と見なすことができる。

これに対し信長は真逆の道を探っている。血で血を洗うような内紛の火付け役となって力でこの火をもみ消している。信秀の考えがしよせん理想ではないことに気付いていたからにちがいない。天道思想に目覚めてからはもはや反面教師でしかなかったはずである。

信長と撫民仁政主義との関係は、信長が自国民を虐げた記録が見当たらないことよって民意を尊んでいた証拠として見なすことができるし、天道思想との関係も「天下」という概念に異常なこだわりをもっていったことから推論が可能である。

このように信秀と信長の考えが違っていたのであれば死ぬまで家督を譲らなかつた理由も読めてくる。その糸口となるのが初陣以後一度も信長に出陣を命じていないという史料上の事実である。庶兄の信広はちゃんと戦に出て戦っているのに嫡男の信長にはその形跡が見当たらない。また青山与三右衛門と内藤勝介という二人の家老らも出陣して武功を立てているのに城主の信長にはそれが無いのである。信長が役立たずの怠け者ならいざ知らず、その反対であることはこれまで述べてきたとおりであり、才能を認めていたにしてはこの扱いは理不尽というほかない。

むろん嫡男の身を案じての配慮であろうが、信広を人質交換に応じて救っていることや、信勝（信長の弟）に本城（末森城）に譲っていることからいたずらに優遇されていたのでないことがわかる。家督相続の件にしても本来なら道三に大敗した時点で責任を取って譲るのがこの時代の常識的な考え方なのである。年齢的な問題も二十歳前に当主となる例が多分にあることから理由にはならない。事実信秀自身信定の生前に二十歳の若さで家督を継いでいるのである（因みに今川義元は十八である）。因習を重んじるタイプにしてはこの信長への対応は奇妙といわざるを得ない。

結論からいうと、答えはいたって単純で、要するに、信長に武功を立てさせたくなかつたのである。信長が大功を挙げるようなことにもなればこの「危うい関係」が崩れる懼れがある。才能を認めれば認めるほどこの危険が増すのである。織田家協調路線と故実礼治主義に拘る信秀にすれば信長の考えこそ浮世離れた甘い理想であり、織田家を破滅させる掟破りの背信としか映らなかつたにちがいない。信秀が大人であればあるほどこの思いが強かつたはずで、とても容認できることではなかつたはずである。

にもかかわらず信長が家督を継いだのであればこの間に何らかの動

きがなければ不自然である。信秀の死が頓死でないことは信長が信秀に代わって証文を打っていることから明らかであり（『織田信長の系譜』／横山住雄著／教育出版文化協会）、また病名が不明では信秀抜きでの継承であったとは納得できない。療養中に急死したとも考えられるが、これは憶測に過ぎず、黙って死んだ証拠にはならないだろう。

ここで参考となるのが武田氏の例である。信玄は勝頼に遺言として次のふたつのことを申し渡したという。自分の死を三年間秘密にしておくこと、そして重臣らと協調してやってゆくこと。武田氏のよくな大勢力でさえこの有様なら織田弾正忠家程度の勢力となれば事態はもつと深刻だったはずである。事実「武功夜話」にこれを裏付ける記事が載っている。

織田上総介（信長）様がお世継ぎとなられたころは、美濃方は川並衆を取り抱え、加賀の江や墨田辺りへ乱入しては上郡を窺う、といった尾張にとつては危ないこと、この上もない状態であつた。

（「武功夜話 信長編」／加来耕三訳／新人物往来社）

このような状況で家督を譲るのであれば独りでなんとかしろというはずがないだろう。道三は信秀でさえ倒せなかつた強敵あいてなのである。いくら非凡であつても実戦経験がないのは致命的である。気位と才能だけでは乗り切れない厳しい現実がこの親子の前に立ちはだかつていたのである。

とはいっても信長以外にこの難局を乗り切れる跡取りがいないのであれば信長に家督を譲るほかない。両者の立場を考えれば信玄的な教訓を受け入れることが家督を譲る絶対条件となるはずである。これを信秀の深謀とはいわないまでも、長年信長を鎖につないできた苦肉の策が最悪の状況で実を結ぶような事態となつていたのである。

信長は自分が損することは絶対にしない男である。このことは生涯狡猾なまでに徹底している。このときも拍子抜けするほど素直に認めただけである。見栄や面子より実利を重んじるポリシーは道三との会見でも色濃くあらわれている。信秀はおそらく隠居してすぐに死んだのだと思う。急死でなければこのように考えざるを得ない。結局この強制的なやり方が後に裏目となって最悪のかたちで平手を見舞うことになるのだが、まずはこの一連の推移を平手の死の付箋として押さえておくことが肝心である。

いよいよ平手の自刃について述べることにする。この後の平手の胸中は察するに余りあるだろう。平手の事件は信秀の死の翌年に起きている。この間になにが起きていたかといえば、信秀の葬儀での信長の悪態があり、赤塚の戦いが勃発し（年に諸説あり）、信長が信秀との約束を守らないという事態が起こり、そんな信長に家臣が愛想を尽かし始めていたという忌まわしい事件がたてつづけに起きている。生真面目な平手には堪え難い現実だったにちがいない。

ではこれが自刃の理由かというところ、この見方は早計といわざるを得ないだろう。この状況で自刃すれば信長を見放したのと同じである。一番力になってほしいときに自刃してさっさと去ってしまうというのでは「見捨てた」と受け取られても致し方ない。では苦言を弄していたかといえば、これも当たらないだろう。信長が話して分かる生易しい相手でないことはわれわれでも分かる程度のことなのだから信長を知り抜いていたはずの平手がこの轍を踏むはずがないからである。

ではなぜ自刃したのだろうか。

『信長公記』は平手の死を伝える唯一の史料である。この答えは典

拠に求めるのが筋である。事件のくだりとこれまでの推理を活用すれば納得の行く理由が見つかるはずである。まずはそのくだりを転載するので通読してほしい。

平手政秀の息子は、長男五郎右衛門・次男監物・三男汎秀という兄弟三人がいた。総領の平手五郎右衛門は優れた馬を持っていた。それを信長が所望したとき、「私は馬を必要とする武士でありますので、お許しください」と小憎らしいことを言って、献上しなかった。信長の恨みは浅くなかった。たびたび思い出して、次第に主従不和となったのである。

三郎信長は、上総介信長と自分から官名を名乗ることにした。間もなく、平手政秀は信長の実直でない有様を悔やみ、「信長公を守り立ててきた甲斐がないので、生きていても仕方がない」と言って、腹を切って死んでしまった。

この中で注目すべき点は信長と平手の総領が「不和」となったという点である。このとき平手は62で、役目を終えていた。となると、年齢的にみてこの総領（長男）が当主であり、平手は隠居していたとみるのが自然である。この点は平手と事件との位置関係（立場）を知るうえでも重要である

馬の件は主従関係が不和となった「きっかけ」に過ぎないことから平手家が信長から離れようとしていたことの隠喩と見なすことができるだろう。些細な不和でないことは平手が自刃していることから明らかである。また両者が一步も譲らずに反目していたことは文面から読み取ることができる。このくだりはそれまで諦観していた平手の身にも忌まわしい機運が及んでいたことを物語っている。

さて仮に平手家が主従関係を断つような真似をすれば、信長はかれらを討つにちがいない。信長は逆らえば身内や兄弟であっても情け

容赦なく裁く男である。平手であつても例外ではないだろう。だが名代の平手と平手家の実力を侮るのは危険である。反信長勢力になびくようなことになれば一大事である。ならば「火は熱いうちに打て」の箴言ではないが、事前に処理することを考えるはずである。信長は自衛的なことに関しては極めて危険な男なのである。

事実、信長はこの危険な性格をむき出しにして平手家に迫っていた。これを表すのが次の一節である。

三郎信長は、上総介信長と自分から官名を名乗ることにした

この前後の脈略を無視した突飛な文章は平手家に対する最後通告的な警告を意味している。織田弾正忠家と何の縁のない官名をこの暮になつて急に名乗り出すからには平手と平手家に対し「過去との決別」を意味する警告と受け取らないと、この直後の「間もなく、平手政秀は信長の実直でない有様を悔やみ、『信長公を守り立ててきた甲斐がないので、生きていても仕方がない』と言つて、腹を切つて死んでしまった」という結びの文章との因果関係が成り立たなくなるからである。特に「間もなく」の語が重要で、こう受け取らないとこの間もなくが、何を受けての間もなくなのか見当が付かなくなつてしまふ（争いだけが原因ならこの文章を入れる必要がないだろう）。

ここまでくるともはや自刃の理由は解けたも同然である。

この状況での打開策は、平手の総領が自刃して事を丸く収めるか、それとも、主従関係を断つか、のいずれかになるはずである。信長の怒りが尋常でないことは子供染みた嫌がらせをしていることから明らかであり、相手が「子供」とあつては詫びても通じるとは思えない。

ところが実際は第三者的な立場に居た平手が自刃することで丸く収まっている。このことから次の見方が成り立つのではなからうか。つまり、息子たちには信長を信じてこれまでどおり仕えるよう死を以て諭し、信長には自分が自刃することで息子たち（平手家）を許して欲しいと頼むかたちで事態の收拾を図ったのであると。

ここで信長の身になって考えてみたい。

当然、信長は、平手は息子らの側に付くと思っていたはずである。当時の武家社会の常識からすれば当り前のことであって、主従関係を結んでいるといつてもしよせんは他人なのである。さらに信秀の死後の傲慢な態度や平手家への仕打ちを考えれば快く思っていると思はずがない。

ところが平手の自刃には多分に信長を救う意図が含まれている。平手がその気になれば信長を負かすのも夢ではないだろう。たとえば誼のある道三（もしくは斉藤家）と結託し、さらに反信長連合と組めば信長が窮地に立つのは必至である。平手の方が、人望・人脈・経験のすべてで勝っており、さらに信長を知り抜いているのであれば、信長がたとえ当主であっても不人気であることから平手に分があるのは明らかである。

にもかかわらず自刃を選んだのであれば信長を立てるのが目的だったとしか考えようがない。信長の危機は織田弾正忠家の危機であり、その危機を自分の家を作っているのであれば（正確には信長が作っているのであるが）、平手が消えてなくなればこの危機を回避できるからである（むろん長男の命を守る意図も含まれている）。

要するに信長は平手が最後まで自分を「裏切らなかつた」と受け取ることで完膚なきまでに打ちのめされたのである。信長の思いとは裏腹に信長の怒りと誤解を解くために黙って忠義を立てて死んだか

らである。信長が驚いたことは童子のように号泣したことから明らかである。つまりこの驚きがやがて衝撃となって号泣というかたちで爆発したのである。

しかしながら自刃しても思いが伝わらなければ意味がないだろう。伝わらなければ犬死と一緒に死んでお終いである。ではなぜ信長が泣いたのか。その答えはいたって単純で、信長が真面目な男だからである。信長は平手の行為を軽く見るほど不真面目な男だろうか。平手を見損なっていた自分を恥じたであろうことは疑いの余地がないと思う。

実はこの生真面目さが信長の強さの秘密なのである。事実信長は休むことなく努力をしている。甘えを嫌い、怠惰を憎み、正義を愛し、勇気を尊び、弱者を認め、見栄や体面に頼着せずに、常に極限の精神状態の中で神や仏がつけ入る隙がないほどの厳しい努力を己の頭脳と肉体に課している。その精神構造はまるで精巧な機械のようにおそろしく真面目（緻密）である。機械であれば扱い方さえ心得ておれば動かすことができる。平手は信長の操縦法を心得ていたのである。だからこそ死ねたのであり、信長も平手の意思を受け入れたのである。生真面目な性格であるがゆえにだれよりも平手の生真面目な性格を尊び慈しむことができたからである。

以上が私の推理である。

次は、いよいよ「桶狭間の戦い」である。

桶狭間の戦い―「バーナムの森説」について 1

桶狭間の戦いの研究は、目下、邪馬台国論争のような様相を弄しているのが現状ようです。邪馬台国が北九州説と畿内説とに別れて論議され、『魏志倭人伝』が研究者のバイブル的な存在となっているように、桶狭間の戦いも、迂回説と正面攻撃説とに別れ、『信長公記』が『魏志倭人伝』的な権威となりつつあるのが実情です。

『信長公記』が脚光を浴びるようになったのは、意外にも最近のこととて、藤木正行氏が中嶋砦の語に着目したことに端を発しています（この砦からの正面突撃説を提唱）。以前にもこの手の大きな見落としがあり、今川軍の本隊が「桶狭間山」という山の上に布陣していたと書いてあるのに長い間見落とされていました。なぜこのようなことが起きるのか不思議でならないのですが、この教訓は他にも見落としがあるかも知れないことの暗示ともいえるでしょう。

事実、桶狭間の勝因は、奇襲や正面攻撃ではなく、別の要因が主因であるはずなのにこの点が見落とされています。なぜそういえるのかというと、『信長公記』にそう書いてあるからです。これが勝因とちゃんと書いてあるのに、固定観念が邪魔をするのか、理性とうまくみ合っていないのが実情のようです。その句と文章に気づけば、当然見方や展望も変わってくるわけで、そこから得る考えも違ってくると思います。これに気付くと、だれもが通説とはまったく違う「天才」の奇想天外な着想と執念に驚くことでしょう。

以上が本稿の趣旨ですが、本題に入る前に確認の意味も含めてわたしの素朴な疑問をいくつか述べてみたいとおもいます。先の見落としの件同様この問題がどうして取り上げられないのか不思議でないからです。

一つ目の不思議は「天候の急変」の問題です。わたしは子供のころからこの問題が腑に落ちませんでした。まるで映画の「大魔人」が現われるときのような描写がどの本にも綴られていて幼心にも胡散臭いものを感じていたからです。

たとえば「信長公記」を例に挙げると、信長が中嶋砦から今川軍の本隊（もしくは義元の居る本陣）を突くために進軍を開始し、「山の麓」にたどり着くやいなや急に空が暗くなって暴風雨になったと記されています。そしてこの激しい嵐が隠れ蓑のような役目を果たしてくれたお陰で今川軍に気づかれずに移動できたというわけです。さらに信長軍の臨戦態勢が整うと、今度は一転してそれまでの嵐がうそであったかのように晴れわたり（原文に「空晴るゝをご覧じ」と書いてあります）、この機に乗じて奇襲が正面攻撃によって義元の首を討ち取ったというわけです。

たしかに時期（旧暦1560年5月19日、新暦1560年6月12日）が梅雨であり、その日がたいへんな猛暑であったことから集中豪雨が起きてもおかしくない状況にあつたといえますが、以下の『信長公記』のくだりを読むと、この日の集中豪雨を通常概念で括弧することはできないでしょう。

山ぎわまで軍勢を寄せた時、激しいにわか雨が石か氷をなげうつように降りだした。北西を向いて布陣した敵には、雨が顔に降りつけた。味方には後方から降りかかった。沓懸の峠の松の根方に、二抱え三抱えもある楠の木が、雨で東に降り倒された。

（『現代語訳 信長公記 上』／太田牛一著／中川太一訳／新人物往来社）

「石」や「氷」という句が激しい雨を強調するための比喩であって

も、楠の木の話は別の意味をもっています。この木が実在した木であることは場所を明記していることから明らかであり、「二抱え三抱えもある」という表現から太い大木だったことが分ります。この巨木のような大木が「雨」でぶっ倒れたというのですから並みの豪雨のほずがありません。大木が雨で倒れるという話は聞いたことがないので百歩譲って風で倒れたにしても物凄い嵐であったことはたしかでしょう。

そんな強風が吹き荒れる最中^{なか}どうやって進軍するのでしょうか。人や馬は大木より軽いのですからまともに風を受ければ吹き飛ばされてしまいます。さらに石や氷のような激しい雨が信長軍の後方からまるで援護射撃をするかのように今川軍の兵士の「顔」「目掛けて降りかかってきたというくんだりも俄かに信じかねます。これでは陳腐なSF映画と変わらないでしょう。

通常の嵐でさえ被害は免れないのですからこのような激しい暴風雨が起こったのであれば、桶狭間一帯はたいへんなダメージ（被害）を受けていたはず。特に扇川と手越川の合流点に在った中嶋砦は増水のためにとんでもない事態となっていたことが推察できます。おそらく両軍とも相当のダメージを受けていたはずであり、とくに奇襲する側の信長軍にとっては、雨で視界と足場が悪くなり、強風で身動きがとり難くなっていたことから悪夢としかいいようのない状況となっていたはず（なぜこの嵐を「天佑」と受け取るのか、わたしには理解できません）。

すべての説がこの話を認めているとなると、この問題はおざなりにできないでしょう。そこでわたしなりに気象学や気候学を勉強し、専門家（気象庁の役人）にも当たってみると、以下のことが分りました。集中豪雨の強風は台風と違って短時間しか吹かないこと。そして吹いてもせいぜい十分か二十分程度がふつうであること。このこ

とから仮に信長が進軍したのであれば、強風が吹いている間はじつとしていて、止んでから進んだという見方が成り立つことになりません。

また気象庁の役人がくれた小冊子（「局地的大雨から身を守るために」）の次のくだりも集中豪雨を理解するうえで参考になります。

「発達した積乱雲は、強い雨を降らせるほか、竜巻などの激しい突風、雷、ひょうなど、狭い範囲に激しい気象現象をもたらすことがあります」

この解説は「信長公記」の記述を端的に換言しているのではないでしょうか。

先の「北西を向いて布陣した敵には、雨が顔に降りつけた。味方には後方から降りかかった。沓懸の峠の松の根方に、二抱え三抱えもある楠の木が、雨で東に降り倒された」というくだりも、ダウンバースト（積雲や積乱雲から爆発的に吹き下ろす気流で、これが地表に落ちると破壊的な気流となって周囲に甚大な被害をもたらす）が地上では、発散的か、あるいはほぼ一方向に吹くという定説と照らし合わせてみると東から北西に向かって一方向に吹いていたことが分り定説と合うことになります。

気象庁の役人が私見としながらも「大いにありうること」という見解を示したことはこの話が荒唐無稽の話でないことを明かす有力な根拠といえるでしょう。したがって、わたしは以上の解釈で自説を説く所存でいます。

ふたつ目の不思議は「無策」で勝ったとする意見があることです。なぜこのように考えるのか、わたしには理解できません。スポーツ

や賭事でさえ無策で臨むということは稀なのに、それを超大国と戦争するのに作戦を立てずに挑むということがどうして有り得るのでしょうか（「戦争」という忌まわしい概念をどのように捉えているのでしょうか）。仮に相手が勝つのが分っているような弱小国であっても、軍を動かすとなれば、作戦を立てなければ動かしようがありません。あの生粋の合理主義者の信長が大事な局面でこのような非合理的な真似をするとは到底考えられないでしょう。

これと関連して今川方に間者スパイを送り込んでいた証拠が見当たらないことからこの考えを想像の産物とする方が居るのですが、この考えも不思議としか思えません。相手の動き（情報）を知らずにどうやって作戦を立てるのか理解できないからです（作戦を立てないのなら別ですが）。証拠といっても本来そんな証拠は有ってはならない（見つかつてはならない）証拠なわけですからそのような証拠を求めること自体ナンセンスなことともいえます。

また証拠がないのは見事に仕事を果たしていた「証拠」とも採れるわけで、証拠がないから「間者を使わなかった」と決め付けるのは少々乱暴な見方といわざるを得ません。したがって、わたしは作戦を立てて臨んだとする立場の者であり、その作戦を仮に「『バーナムの森』作戦」としてこれから語ろうとする素人ですが、わたしの論拠は史料にちゃんと明記されているのでこのような証拠第一主義的な方にとっては格好の仮説となることでしょう。

このほかにも不思議に思えることがままあるのですが、些細なことなので、早速、本題の「バーナムの森作戦」の概要について述べることにします。

桶狭間の戦い―バーナムの森説について 2

『マクベス』の「バーナムの森」の戦術が、なぜ桶狭間の戦いと関係があるのかについて述べる前に、まずは「作戦」と「奇襲」の定義について考えてみたいとおもいます。

信長に作戦が有ったのであれば、その作戦は集中豪雨を想定しない作戦だったことは間違いないでしょう。予言者でもないかぎり、集中豪雨が起ることも、その時を予測することも、できないのですから、その作戦は、集中豪雨が起きようと、起るまいと、勝てる作戦でなければなりませんからです。

そんな信長にとってあの激しい暴風雨は予期せぬ誤算だったはずであり、にもかかわらず、冷静に対処できたことがある意味では最大の勝因といえるでしょう。何事も諦めたらそれで終りなわけですから最後までベストを尽くしたことが強運に転じる動因となっているからです。ここに「織田信長」の面目が見事にあらわれています。

次に奇襲の定義について考えてみましょう。奇襲をどのように捉えるかによって意見が分かれるからです。「広辞林」によると、奇襲とは「敵のゆだんしているすきをねらって攻めること。不意打ち」とありますが、これは一般的な解釈であって、定義とはいえないでしょう。

わたしは岩島久夫氏が『奇襲の研究』（岩島久夫著／PHP研究所）のなかで説いている説を定義としたいと考えています。その理由は以下のくだりを読むと理解して頂けるとおもいます。

大事なことは、奇襲は、その奇襲が予測される時であっても、必ず

奇襲する側に分があり、計画当を得ればほぼ確実に成功するという事実である。だから奇襲である。でなければ奇襲ではない。奇襲は、相手が考えるであろう時、場所、手段その他の裏をかいて行動するわけだから、成功するのは当たり前なので、当り前の常識的行動をしたのでは奇襲にならない。奇襲する側は、自己の計画を秘匿し、行動をあざむき、相手に誤解を与え、味方をも欺瞞し、考えられないようなことを行ない、不可能と思われるようなことを現実化し、周到に計算し、果敢に決心、実行する。だから成功する。

このくだりの最後の文章を定義の要素として区切ると、次のようになります。

- 1 自己の計画を秘匿すること
- 2 行動をあざむくこと
- 3 相手に誤解を与えること
- 4 味方をも欺瞞すること
- 5 考えられないようなことを行なうこと
- 6 不可能と思われるようなことを現実化すること
- 7 周到に計算し、果敢に決心し、実行すること

この7つの要素（要件）をクリアすれば岩島氏が言うように失敗はほとんどありえないでしょう。考えられないようなことをされ、不可能と思われるようなことを現実化されては逃れる手段^{すべ}が無いからです。思いつきの奇襲なら凡人でもできるでしょうが、信長を天才と見なすのであれば、この条件は譲れないハードルとなるはずで

事実、信長は作戦会議の席で世間話しかなかったといわれています（作戦について語ったとする史料もあります）。この沈黙は、1（自己の計画を秘匿すること）と4（味方をも欺瞞すること）の要

素と見なすことがきでますし、2（行動をあざむくこと）と3（相手に誤解を与えること）の要素にしても一例として鷲津・丸根の両砦に援軍を送らなかつたことが挙げられます（詳細は後述します）。また中嶋砦に進軍したことは逃げ隠れする気がなかつたことを意味しており、この行動は明らかに不意打ちの理念と矛盾しています（中嶋砦は桶狭間山から一望できたといわれています）。

このように捉えてゆくと、5（考えられないようなことを行なうこと）と6（不可能と思われるようなことを現実化すること）の要素が欠けていることに気付くのではないでしょうか。そしてこの二つの要素がもっとも肝心な要素であることにも気付くと思います。

ここで「バーナムの森」が登場してくるわけです。「バーナムの森」については『マクベス』を読まなくても次の場面を引用すれば要領を得るとおもいます。

マルコム　　どうやら枕を高くして寝られる日が近づいたようだな。

メンテイス　もう安心でございませう。

シユアード　この森は？

メンテイス　バーナムの森と申します。

マルコム　　全軍に命じて、めいめい木の枝を頭上にかざして進軍するようにしてくれ、こちらの兵を隠し、敵の偵察陣に、まちがった報告をさせてやろう。

『マクベス』（シェークスピア著／福田恆存訳／新潮社）

要するにマルコムは森に見立てた「奇策」でもって父（スコットランド王ダンカン）の仇を討つわけですが、信長もこの手の「奇策」で義元を負かしたわけです。

実際、その奇策が、考えられないような奇策であり、不可能と思われることを現実化した奇策であるがゆえに見落としが起きるのでしよう。マクベス軍の兵士が「森が動いている」と錯覚して動揺したように、今川軍の兵士もその奇策を見てびっくり仰天して逃げ出したわけで（事実そのように記してあります）、この決定的な場面が常識では考えられない奇策であるがゆえに読む側も見落とししてしまうのだと思います。

奇襲的観点からいうと、奇襲を否定する正面攻撃説の立場は「微妙」のようです。正面攻撃説の論旨は「無謀ともいえる正面攻撃を敢行することで今川軍の意表を突き、これを機に怒涛の如く今川軍に攻め込むことで戦の主導権を握り、そして義元の居る本陣に向かって一気に攻め込むことで義元の首を討ち取った」ということだと思っております。意表を突いたにもかかわらず、なぜ「不意を突く」ことを旨とする奇襲を否定するのか、その根拠がよく分からないからです。

「日本国語大辞典」（小学館）によると、「意表を突く」とは「予想外のこと、考えてもいなかったことをして驚かせる」の意味であり、「不意を討つ（突く）」の意味は「相手の油断をみて、いきなり何かをする。奇襲する。また、おどろかす」とあります。さらに「意表」と「不意」の意味を調べてみると、意表の意味は「考えていないこと。予想外」（『広辞林』）であり、「不意」の意味は「思いがけないこと。だしぬけ。案外」（『広辞林』）とあります。これはどう考えても同じ意味を表しているのではないのでしょうか。仮に迂回説への反論であっても、迂回は奇襲のひとつの手段に過ぎないので、迂回説のみをもって「奇襲ではなかった（他に不意を突く手段はない）」とは断言できないでしょう。

ついでにふれると、正面攻撃説の説明だと、暴風雨が起きなかった際の対抗措置がさっぱり分らないという難点が残ります。はじめから正面攻撃をかけるつもりでいたのであれば狂気の沙汰といわざるを得ないでしょう。

というのは、中嶋砦は桶狭間山から約2・5キロの位置に在ります。そして、桶狭間山（今川軍）から中嶋砦（織田軍）が見えたのであれば、敵に見られている状況で、この区間を走破してから攻めることとなります。しかも、隘路のような狭い道を、山を駆け上がりながら攻めるわけですから今川軍の方が圧倒的に有利なことは否めません。さらに、暴風雨も、奇襲も、関係ないのであれば、どうやって攻めるのでしょうか。これでは戦力差は問題視していなかったといっても過言ではないでしょう。

しかしながら、このような見方を採るよりも、桶狭間（＝田楽ヶ窪）でなくても義元の居場所さえ分れば義元を討てる自信（作戦）をもつて臨んでいたとみる方が合理的でしょう。なぜなら、「見られていてもよい」のであれば「知られていてもよい」という見方が成り立つわけで、中嶋砦が今川軍から見えたからといって迂回は意味を成さない（ありえない）とは言えないからです。

奇策があれば不意を突くだけの奇襲よりはるかに柔軟に動けるのは道理でしょう。戦略的には奇襲が一義的要素であつても、戦術的には奇策が一義的要素となるわけですから、要は奇策がばれさえしなければ、見られていようと、知られていようと、関係ないからです。では信長がとつた奇策とは何だったのでしょうか。答えは『信長公記』の次のくだりに記されています。

右の衆、手々に頸くびを取り持ち参られ候。右の趣おもむき、一々仰せ聞かれ、

山際まで御人数寄せられ候ところ、俄に急雨、石氷を投げ打つ様に、敵の輔に打ち付くる。身方は後の方に降りかゝる沓掛の到下の松の本に、二かい三がみの楠の木、雨に東へ降り倒るゝ。余の事に、熱田大明神の神戦かと申し候なり。空晴るゝを御覧じ、信長槍をおつ取つて、大音声を上げて、すは、かゝれ、と仰せられ、黒煙を立て懸かるを見て、水をまくるが如く、後ろへくはつと崩れたり。弓、槍、鉄炮、のぼり、さし物等を乱すに異ならず、今川義元の塗輿も捨て、くづれ逃れたり。

『信長公記』 戦国史料叢書2 人物往来社

このくだりを読めば答えは明らかでしょう。勝因は、黒煙を立て懸かるを見て、水をまくるが如く、後ろへくはつと崩れたり

と、書いてあるからです。

つまり、織田軍は、ただ攻めたのではなく、「黒煙」を上げながら突撃したわけです。そして、今川軍はこの攻撃に因ってパニックを起こし、後ろへ崩れ去ってしまったわけです。事実、「黒煙を立て懸かるを見て」、「水をまくるが如く、後ろへくはつと崩れたり」と書いてあります。

その驚きが尋常でなかったことは「今川義元の塗輿も捨て、くづれ逃れたり」という一節を読めば明らかでしょう。つまり、義元を置き去りにして脱兎の如く逃げ出したというわけです。

このくだりは、中嶋砦に移ってから今川軍が潰走するまでの経緯を記しています。直接的な勝因は攻撃開始から総崩れするまでの間に有るのでしょうから、この間にこの文章しか記されていないとなる

と、如何なる推理を試みてもこれ以外の帰結はあり得ないでしょう。因みにこの場合の「懸かる」の意味は、「垂れる」や「下がる」ではなく、「正面から攻める」(『広辞林』より引用)と同じ「攻める」の意味であることは論じるまでもないでしょう。

この黒煙を奇策と採るのは雨が降っているからです。しかもその雨が凄まじい集中豪雨(もしくは暴風雨)であれば自然発生的に煙が上がることはあり得ません。にもかかわらず、煙が上がったのだとすると、状況からみて織田軍が放った黒い煙としか考えられないでしょう。そして、その煙と突撃とが不可分の関係にあり、その黒い煙がバーナムの森のような効果を今川軍に与えたのであれば、この攻撃は不意を突くだけの単純な奇襲ではなく、「奇策(計略)による奇襲」と捉えないと史料を無視したためちやくちやな解釈となってしまうでしょう。

以上のことから、この奇策が5と6の要素となるわけです。この奇策が、「考えられないような奇策」でなければ驚くはずがなく、「不可能と思われるようなことを現実化した奇策」でなければあの戦果はあり得ないからです。

さて、残すは7の要素(周到に計算し、果敢に決心し、実行すること)のみとなるわけですが、この要素については後述するので省くことにします。

最後に先に紹介した岩島久夫氏が奇襲の定義に反対の意見を述べていることをお断りしておきます。氏の許可なく引用している非礼上おそれるそかにできないからです。たいへん示唆に富み指摘でもあるので参考までに記しておきます。以下がそのくだりとなります。

「奇襲」というものにはもともと定型がない。そのため、定義づけて狭いところに奇襲を押しこんでしまうのは、逆に危険でさえある。奇襲が成功するのは、それが定型がなく、既成概念の裏をかくからである。だから厳密に定義づけられれば定義づけるほど、奇襲の教訓から遠のいて行くことになってしまう。流動的な世界でいつどこにどういう形で起るかわからぬ奇襲、あるいは奇襲的事象に対するためには、柔軟な頭とシステムが要求されることは、今さら強調するまでもないだろう。

奇襲の研究 情報と戦略のメカニズム 岩島久夫著 PHP研究所

以上でバーナムの森説の概要が済んだので、次は桶狭間の戦いの流れ（予備知識）について述べることにします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3798r/>

世界を跨ぐ力学の判例・織田信長

2011年9月10日18時41分発行